『鶯塚千代廼初声』初編・二編　翻字と注釈

藤本　灯・佐々木委久・久保　柾子・
田中　百花・岩﨑凜太郎・市村　太郎

はじめに

本稿は、江戸後期の人情本『鶯塚千代廼初声』（初編・二編は松亭金水編、三編・四編は山々亭有人編、四編は明治二年［1869］序）の初編および二編本文を翻字したものである。

『鶯塚』譚の受容と展開については、高木元「黄鳥墳説話の諸相」（『國文学』一九九九年二月号〈特集・ジャンルを横断する近世文学の新局面〉所収）に詳しい。これによれば、『鶯塚』をモチーフとしたストーリーは、名所案内記『摂津名所図会』（寛政八～十年［1796-1798］刊）、『蘆分船』（一無軒道冶、延宝三年［1675］刊）をはじめとし、浄瑠璃『芽源氏鶯塚』（浅田一鳥等、宝暦九年［1759］、大坂豊竹座初演）、上方読本『〈長柄長者〉絵本黄鳥墳』（栗杖亭鬼卵、文化八年［1811］刊）**【次頁図1】**、合巻『鶯塚梅赤本』（松亭金水（初編～五編）・泉竜亭是正（六編）、嘉永三四年・明治十四年［1850-1851・1881］刊）**【次頁図2】**、人情本『鶯塚千代廼初音』（松亭金水（一二編）・山々亭有人（三四編）、安政三年・明治二年［1856・1869］刊）、講談本『〈佐々木源之助・諏訪道仙〉鶯塚の仇討』（邑井一講演、加藤由太郎速記、明治三十五年［1901］再版）など、さまざまな文芸ジャンルにまたがって創作、翻案された。高木によれば、本稿でとりあげる人情本は、「筋も展開もほぼ読本通りで、文体は会話を主体とし、書翰文を使うなどして人情本に相応しく改変してある」。すなわち、物語としての独創性は乏しいものの、そうであるからこそ、ジャンル間の語彙・語法の比較には極めて有効な題材であると考えられる。

翻字にあたり、底本には東京大学国語研究室蔵本を用

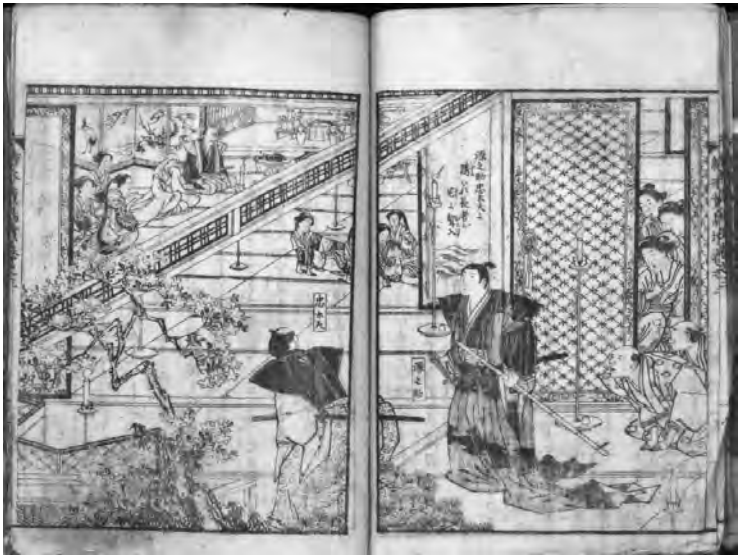

図１ 『〈長柄長者〉絵本黄鳥墳』（藤本架蔵本）巻３　９ウ・10オ

図２ 『鶯塚梅の魁』（『鶯塚梅赤本』後印改題本、佐々木架蔵本）２編上　６ウ・７オ

い、東大本が不鮮明な箇所は早稲田大学図書館蔵本にて補った。また読解上重要と考えられる任意の箇所に語釈を付し、本稿のページごとに示した。語釈に用いた辞書類の出典は明記するが、適宜記述を要約、省略をおこなった場合がある。『日本国語大辞典〈第二版〉』は『日国』と略称する。

○東京大学国語研究室蔵『鶯塚千代廼初声』(https://kokugo.l.u-tokyo.ac.jp/data/bunken.php?title=chiyonohatsukoe)

○早稲田大学図書館蔵『鶯塚千代廼初声』(https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_02936/index.html)

凡例

1　本文の行移りは原本にしたがった。

2　頁移りは、その丁の表および裏の冒頭において、丁数・表裏を括弧書きで示した。また、口絵・序文の丁には丁数表示の上部に「口」を付し、挿絵の丁には丁数表示の下部に「・絵」を付した。

3　仮名は現行の平仮名・片仮名を用いた。

4　仮名のうち、平仮名・片仮名の区別の困難なものは、現行の平仮名に統一した。ただし、形容詞・副詞・感動詞・終助詞・促音・撥音・長音・引用のト等に用いられる片仮名については、原表記で示した場合がある。〔例〕安イ、モシ、「ハイそれは」ト、意気だヨ、面白くツて、死ンで、それじやア

5　漢字は現行の字体によることを原則としたが、次のものについては原表記に近似の字体を用い、区別した。「云／言」「吊／弔」「哥／歌」「坐／座」「无／無」「條／条」「皈／帰」「篭／籠」「藝／芸」「計／斗」「蹈／踏」「餘／余」「餚／殽／肴」

6　繰り返し符号は次のように統一した。ただし、漢字1文字の繰り返しは原本の表記にしたがい、「〻」と「々」を区別して示した。

平仮名1文字の繰り返し〔例〕またゝく、たゞ

片仮名1文字の繰り返し〔例〕アヽ

複数文字の繰り返し〔例〕つら〳〵、ひと〻〵

7　合字「まゐらせ候」は〔まゐらせ候〕と示した。

8　振り仮名は原本と近い位置に付した。

9　原本に会話を示す鉤括弧が付いていない場合も、これを補い示した。

10　原本にある話者名は【　】で示した。〔例〕【いく】

11　割注は［　］で囲み、割注内の改行位置は原本通りに示した。

12 不明字は■で示し、推定される文字がある場合は（　）に入れ傍記した。

13 印は〈印〉として示した。

14 画中文字の存在する行の開始位置に〈画中〉と記入した。

15 誤字・脱字・衍字と思われる箇所にはママと傍記した場合がある。

16 書簡部分は二字下げで示した。

（上・ロ1オ）

黄鸝塚千代迺初声初編叙

あらたまの。年たちかへるあしたより。待るゝものは鶯の。声なりけりと古歌にもいへり。実にや初陽毎朝来。聴たび毎に耳新まる。ことほぎ鳥と称すも宜なり。これを愛する長柄の女児が。心の風雅も思ふべし。爰に黄鸝塚の物語は。鬼卵ぬしが綴る処。四方の看官その作意を。奇なりとして措ことなし。これに因て書肆のいはく。これを今様の風に換て。幼稚児たちにも読易きを。旨と編らばまた一栄。春雨ならで屋を潤し。よろこび鳥の声を聞んと。促がされて辞みも敢ず。筆は採ども藪鶯の。片言まじりなるうへに。今は老さへ鳴竭し。さらに興なきたゞの鳥。しかはあれども時至り。春さへ来らばおのづから。

（上・ロ2オ）

轉る時のなからずやはと。鉄面皮は数年の修行。不鈍不臆まづ初編の。三まきをば綴り畢ぬ。猶引つゞき出精して。二篇三篇のその巻には。所謂珍説奇談もあり。たゞ野暮なるを見許し給ひて。かはらぬ御贔屓を願ふとまうす

（上・ロ1ウ）

（上・ロ2ウ・絵）

おもひ／いづる

○長柄長者の／女児／於梅

（上・ロ3オ・絵）

ときはの山の／いはつゝし／いはねは／こそあれ／恋しき／ものを

＊古歌…素性法師「あらたまの年立帰る朝よりまたるる物はうぐひすのこゑ」（『拾遺和歌集』巻一・春・五・延喜御時月次御屏風）

＊初陽毎朝来…『古今和歌集』「仮名序」の「花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける」に関連して、『古今和歌集序聞書三流抄』（『中世古今集注釈書解題二』所収）に「或年ノ春、住ケル家ノ前ナル梅ノ木ニ鶯来テ鳴。其声ヲ聞バ、「初陽毎朝来、不相還本誓」ト啼ク。是ヲ見レバ歌ナリ」、『古今和歌集頓阿序注』（同）にその訓釈「初春のあした毎にはきたれども逢はでぞかへるもとのふるすに」等がある。

＊長柄…現大阪府大阪市北区にある地区。「長柄村田圃の中にあり。家上に古梅あり、花英六形なりとそ。土人云元朝此梅に鶯来て鳴初るといふ。此家について説々多し。後人符會の論をなす。采るに足らず。按するに上古高貴の荒塚なるべし。此類所々にあり。」（『摂津名所図会』）

＊鬼卵ぬし…栗杖亭（大須賀）鬼卵［1744―1823］。江戸後期の読本作者。「長柄長者黄鳥墳」の作者。

＊藪鶯…藪の中にいる鶯。藪で鳴く鶯。また、野山の鶯。転じて、都会風の言葉の使えない田舎者。（『日国』）

＊拙著堂のあるじ…松亭金水の別号。

孝心貫天百／折千磨／竟討讎揚／名於万天
○河内鴫野の／郡司の子／源之助零落て／非人となる

（上・口3ウ・絵）
梟鳴松／桂枝／狐蔵
○佐々木源太左エ門実頼／廓に遊びて帯大尽と／いふ
○長柄の長者が甥／重三郎

（上・口4オ・絵）
蘭菊／叢
冬の池に／すむ／鴛鳥の氷を／あさみ／かくるとすれと／あらはれに／けり
京都島原／大鶴屋の／遊女／九重

（上・口4ウ・絵）
長柄長者／第の図／この殿は／うべも／とみけり／さきくさの／みつば／よつばに／とのつくり／せり

（上・1オ）
鶯塚千代廼初声初編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

およそ人の世の栄枯得喪を。糾なへる縄に譬ふ。縄を糾ときその一筋。右より上に浮むるとすれば。忽地に左より

図3　『増修改正摂州大阪地図』より「鶯塚」(文化3年［1806］刊、国立国会図書館デジタルコレクション)
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541883/3

して下に沈む。こゝをもていふなるべし。土地は摂津国天満の辺り。むかしと今は地の理も替り。且その名さへ呼かへたれど。今いふ市の側にやありけんその比はまだ草深くして。往来

（上・1ウ）

は絶ぬ繁華といへど。人の家居も秫なるが。堤の大松を便りにして。竹の柱に菰の檐。二畳ばかりの赤土の小屋は。いはでも知れし野伏りの。雨露凌ぐ設けなり。母子と見えて年の比。四十ばかりの大年増女と。十九か二十と見ゆる弱冠。襤褸をまとひ手足さへ。垢じみて寠れたる。姿なれども斯なり果ぬ。以前床しき人品にて。傍にかけし小鍋の下。落葉あつめて竹火箸。さきの煙るを消ながら

【男】「なるほど乞食を三日すれば。忘れられないといふことを。

（上・2オ）

よく人もまうしますが。斯して往来の袂に携り。間の宜ときは二百の餘も。囉うことがありますから左様して見ると二日や三日。雨雪で寐て居ても。どうか斯か飯は食ひ。夫からまた出てたゞ囉うから此様な気楽はありますまいかナ。サアお粥が出来ました此比餘まり何もないから。先刻見当つたこの目刺二三把買ておきました直に焼てあげませう「ナニ吾儕しやァ宜お前給なヨなんぼ年が若いとつてこの寒いに袷一枚それさへ裏が切きつて。肝心の背中と腰は。単

（上・2ウ）

ものになつて居る何様か繕つてとおもふけれどそのうち着更るものはなし思へばホンニ石川と源吾めが恨めしい。吾儕は女お前はまだ。年はいかず御上の容子も。しらないと見掠めて。老爺さんが不慮の御最期。その敵さへ誰ともしれず。歎いて居る所へ着込み。その咎によつてお前と両個を門前払ひにするといふ。非道なことか世にあらうか夫といふも源吾めが家を押領する巧み石川どのへ取入て今回の騒ぎを僥倖に。吾儕等を逐出す憎さ。

（上・3オ）

アノ時吾儕は悔しくツて。協はないまでも源吾めを。一太刀と思つたが。イヤ〳〵こゝが堪へ所だ。左様すれば各々の。胸は晴るやうなもの。何をいふにも石川どのがお上を盖に計らふこと。上意に背いた何ぞと言て。万一お前を遠くへでも。遣られる様なことでも出来ると。敵を索ねる手段もなし。まづ〳〵こゝは堪忍して。後に何様とも仕やうがあらうと。寥々としてお前と両個。逐出されて見ると詮方なし。まさか近別に居られもせず。こゝへ来て袖乞とは。ホンニ誠に思ひ

（上・3ウ）

＊天満…大阪市北区の南東部、大川（天満川）と天満堀川（埋立て）に囲まれる地域の総称。江戸時代は大坂三郷の一つの天満組の地。『日国』【図3】

もよらぬ。夢ではないかと思ふのサ」ト聞て此方もふり返り【男】「貴嬢は勿論私とても。何様に悔しいか知れませんが。被仰通り何を申も。御上よりの御沙汰とあれば。其処を彼是まうされず。その侭に引取ましたが。家に伝はる朝日丸の。短刀ばかりは持て出て。コレこの通り竹杖の。中に仕篭でおきました。後日敵を討おほせ。当下これを御上へ出して。再興を願ひましたら。御由緒もある佐々木の家。まんざら夫なりにもなりますまい。

（上・4オ）

叔父の源吾とのが悪巧みで。石川どのといひ合せ。家をば押領いたしても。御上まで通つて居る。この短刀がない日には。佐々木の家督とはいはれますまい」【母】「ヲヽよく夫は気が着た。吾儕はまた家の系図。これは大事と当下に。懐へ隠して出た。左様して見れば源吾めは。たゞ当分の中ばかり。今に何様かなるだらう」ト両個が話説をもて見れば。これは河内の郡司なる。佐々木源太左衛門が一子源之助。その妻なる於幾佐の両個。源太左衛門

（上・4ウ）

が不慮の横死に。かく零落はせしものなり【源】「ホイ〳〵話説に気をとられて。お粥がどうやら飯になつた。ハヽヽヽ和らかで腹にあたる気遣ひなし。サア冷ないうち上りまし」ト盛て出せば【きさ】「お前も給なヨ。ヲヽ塩加減がよく出来た。下司の業は誰にでも。直出来るといふが違ひない。竟ぞ米一合でも。焚た事のないお前だけれど。この頃は上手になつた。成ほど目刺もとんだ宜」ト両個は飯を食仕まふ。遠寺の鐘声日没を告。塒に帰る鴉の声。唖々として物寂し

（上・5オ）

【源】「サア慈母さんお寐まし。些お腰を揉ませう」【きさ】「ナニお前も草臥たのに。宜にして寐転ひな。此比中は寸白の所為か。どうも腰がひつぱつて。切なかつたがモウ快ヨ」【源】「何と言ても下冷がいたすからでございます。ナニ草臥はいたしません。サア〳〵揉であげませう」ト暫く揉で居るうちに。被物さへも薄けれど。この比馴て歟呿と。寐ればその身も倚そひて。労れしまゝに熟睡する。眼覚ぬほどぞ錦の帳も。綾の衾もこの襤褸も。かはらざるこそ浮世なれ。その次の日も

（上・5ウ・絵）

源之助

（上・6オ・絵）

おうめ

おいく

＊寸白…大（寄生虫によるものと誤認されたところから）婦人の腰痛、生殖器病の総称。『日国』

お梅／鶯の礼に／乞食に金を／あたふ

（上・6ウ）

朝飯を。仕まへば徐々たち出て。往来の人にとり携り。一銭二銭の合力うけ。もはや昼ともおもふ頃。動也々々来る一族あり。是は何方の縉紳ぞと源之助は傍に身を倚せ。見れば供人十四五名。的歴なる女乗物。夫に引そふ侍女も。みな艶麗なる衣類着て。徐々と来りしが。暴に侍女さわぎたち「アレサ早く逐ておやりヨ」「ヱヽ気味の悪い怖い眼をして。吾儕を白眼つけましたは」「何だネ其様に怖いかヱ」ト三人四人立騒ぐ。源之助は何ぞと見るに。一羽の鶯鷹に

（上・7オ）

逐れて。既に危き景勢なるが。一生懸命掻潜りて。源之助が襤褸の広袖。矢庭に閃りと飛込をり。慕ひ来るは鷂鷹なり。是ぞと持たる短かき竹杖。とり直して丁と打ば。うたれて鷹は傍へ落る。この時件の侍女は。駆よつて眸々目。源之助は懐へ飛入たりし鶯を。そと捕へて【源】「貴娘がたの。お尋ねなさるはこの鶯か。左様ならば」トさし出すを後より来る侍女が。高蒔絵せし鳥籠をかゝへ「ヲヽ唐琴は満足かヱ。ヤレ〳〵浮雲ない事だツた」ト

（上・7ウ）

かの鳥籠に入れて往く。先へ来りし侍女は。年頃二十ばかりにて。姿状も美しきが。莞爾として傍へより「ヲヽよく助けて下すつた。アノわたしは長柄に居る。浜左衛門とまうす人に。使はれます幾といふもの。けふはお娘御のお梅さまが。神明へ御参詣。アノ鶯はお梅さまの御秘蔵。よく馴て居ますから。籠は在ても放し飼。けふもお連なされた所。鷹に逐れて彼通り。既に攫まれやうといたしたを。お前のお蔭で助けられ。お梅さまが嘸やさぞ。お歓びでございませう。何れお礼

（上・8オ）

がありませうから。些待て居て下さい」トいひ捨て駆戻りしが。駕の簾を引あけて内より顔をさし出すは。十七八の婀娜女児。蘭麝の薫り馥郁と。広き野路を匂はしつゝ。その顔ばせの清らかさは。雪に光を副たるごとき。嬋娟たる美女なるが。こなたを霎時うち瞻望。何やら密々低語て。侍女お幾はまた駆来り【いく】「鶯の命の親。どのやうな御礼でも。なさり度と被仰けれど。途中のことでお心に。任せぬながら有合を。少しばかりお礼に

（上・8ウ）

あげる。そして娘さまが被仰には。また四五日のうち神明さまへ。お参りはこの道筋。どうぞ当下もこゝへ出て。居なさるやうにと被仰たは。まだお礼が少ないと。思し召てのことであらう。必こゝに出てお在ヨ」【源】「これは〳〵彼式に。箇様なお礼を頂きましては。誠に分に過ますが。御覧の通り

人さまの。お慈悲で助る非人の私。御辞退は申ません。何卒宜しくお前様から。お礼を被仰て下さいまし」ト土に手を着く一礼は。時世といへど是非もなし。お幾は点頭【いく】「アヽ左様

（上・9オ）

申スヨ。お前佶度この次にも。間違ひなく出てお在」ト呉々いふて立去れば。轎夫は駕を舁あげて。天神橋へとさしかゝる。お梅は駕の小窓より。見ゆる限り振返り。名残をし気に舁れゆく。源之助はおもひもよらず。紙包みを披きて見れば。小粒にて金三両あり。我にもあらでうち駭き。厚い紙で巻たれば。重みも知れず多くても。一朱銀の四ツ五ツも。あると思ひて貰ひしが。三両とは多分のこと。跡逐かけて返さうかと。既に片足を蹈出しながら。思ひ返せば長柄

（上・9ウ）

にて。浜氏とは長者のことなり。その女児が三両の。金は此方の二文か三文。また返すとも一旦呉たを。取戻すといふ事はあるまい。左様して見ればほんの隙入。彼是するだけ先でも面倒。このまゝ囉うて母人にも。歓ばせてと逸散に。小屋に帰りて斯々と。語れば母も大きに喜び【きさ】「此様なことは昔噺に。聞たこともない僥倖。それといふも常々から。心がけよく親孝行を。皇天さまは御存じで。箇様いふ事もあるのだらう」ト母子倶々満面に。笑をつくりて歓びけり

（上・10オ）

第二回

かくてその翌日源之助は。米味噌などを買集め。「さてこゝに便々と。その日〳〵の口拵ぎを。するは宜れど肝心の。敵の手がゝり知るよしなし。然ながら翌食ふ。物がなければ是非もなく。心ならずも日を過せしが。零来つたる僥倖に。まづ当分食にはこまらず。風に聞ばその敵も。佐々木と名乗ものゝよし。一体北国の者なれど。主用かねて京都に在と。噂に聞たこともあり。されば翌より京都に立越。それ

（上・10ウ）

かあらぬか探つて見たし。十日ばかりは淋しくとも。こゝに一人で在せよ。」といふにおきさは点頭て。「まづ何よりも大事な訳。かならず母に心を遺さず。尋ねて若も知れたなら。早く本望遂たがよい」と。いと潔よき挨拶に。源之助は勇み立。翌日こゝをたち出たれど。何れへ往ともこのやうな。襤褸を着ては非人の姿。都合の悪き事もぞあらん。見苦しくとも袖身頃。揃ひし物を求めんと。三條の古手屋にて。価賤きを見繕ひ。それを着かへて京の町々。たゞぶら〳〵と

＊轎夫…おろせ→かごかき【駕籠舁】駕籠をかつぐことを業としている人。かごや。『日国』

＊隙入…手間どること。時間がかかること。用事に時間をとられること。『日国』

＊便々…いたずらに時間の経過するさま。むなしい行為、無用の事柄などで時間を費やすさま。『日国』

（上・11オ）

二三日。歩行て物に気は着れど。一点ばかりも手掛りなし。廓は人の入込む所。便宜を得まじきものにもあらずと。その翌日は島原の。廓に入りて尋ぬれど。顔は素より名をさへも。定かに知らねば俗にいふ。雲を掴むの喩へに似て。心はさらに楽しまねど。了得廓の賑ひば。言葉に述べきやうもなく。揚屋々々の軒毎には。思ひ〳〵の丸提灯。羞明までにかけ連ね。坐敷々々の銀燭は。川辺の星とも過まつべく。幇閑末社が高笑ひ。並ぶ歌妓が弾三弦。二挺

（上・11ウ）

鼓の拍子よく。連節に謡ふ浄瑠璃端唄は。紂王長夜の飲宴を。こゝに摸すとおもはれたり。当下年まだ二十一二の。歌妓と見えて婀娜めきし。一人の美女佇み在しが。客と見えて二十四五の。艶男その横町より。出ると等しく美女が「アレ憎らしい人を待せて。何処の穴へ這入て居るンだヨ」トいはれて男は恟くりせし。思いれにて駆出すを。女はやらじと袖引とめても。ふり払ひて逃出すにぞ。小褄とり〳〵下駄の音。高やかに逐駆れども。了得男の足なれば。はや二三間遠ざかる。女はやらじと喘々。逐かくるその却含。後に挿たる玳瑁の。釵の落たもしらず。源之助はこの時に。かの女の跡よりゆき。先釵を拾ひあげ【源】「アモシ〳〵釵が落ました」ト声をかけても耳にはいらず。猶その男を逐駆る。源之助は「よしなきものを。拾ひけるよ」と呟きながら。また早足に逐かくるに。傍なる茶坊の庭。切戸を開きて駆込だり。されば源之助も続て入り【源】「モシ今こゝへ這入なすつた。女中に鳥渡おめにかゝり度ございますが」ト

（上・12ウ）

いへば其処なる少女聞て。「アイ」といひつゝ奥へ往しが。程もあらせず以前の女。着物の前をあはせながら。息をきり〳〵出て来て【女】「ハイどなたでございます。何の御用」ト問かけられ【源】「イヤ吾儕は通りがゝりのもの。今お前が駆る却含に。この簪を落しなすつたから。人が蹈でもすると悪いと。拾つて跡から声をかけても。聞付ないで爰の宅へ。御這入だから持て来ました。サアお渡しまうします」ト出せば女は莞爾して「ヲヤ〳〵左様でございましたか。一向と気が着ません。

（上・13オ）

こりやア大きに有がたう」ト釵とつておし戴き「マア何にしろお前様。此方へお上ンなさいまし。此通り取籠で。二階も一ぱいお客があり。お構ひ申ことも出来ませんが。責てお茶でもあげ

＊玳瑁…「玳瑁(1)」（ウミガメ科のカメ）の背甲からつくった装身具や装飾品。鼈甲として珍重される。（『日国』）

ますから」ト言捨て奥へかけ入る。源之助は便々と。こゝにあるべき身ならねど。何方を斥て往かたなく。倘も何ぞの手がゝりと。思へば其処に尻うちかけて。二階の騒ぎを聞ながら。アヽ人の身の上は。これほどにも違ふものか。一夜千金を抛て。花をふらせる大尽あれば。又零落てたゞ一飯を。食さへ心に

（上・13ウ）

任せぬあり。然ながらその大尽と。いはるゝものも黄金の徳のみ。倘これを失へば。我々とおなじ姿。楽しみ極まりて哀み生ずと。往昔の人は言おきけん。今日の大尽翌の乞食。何ぞ定まることあらんと。歎息なして在けるが。傍なる小子舎にて。密々と話す声。また折々は泣声にて。恨み喞つも恋ゆゑと。いはねどしるき男と女。什麼この男は重三郎とて。長柄長者の甥なるが。物学びの為京登り。逗留の徒然に。不図嶋原の廓に入込み。大鶴屋の九重と。深く

（上・14オ）

契りて通ふほどに。黄金に竭るは客の常。叔父の長者に種々の。偽いひて多分の金を送つては貰ひしかど。はや夫さへも失ふのみか。虚言といふこと長者に知れ大に怒りて勘当の。身となり果し哀しさは。かくまで深き九重に。はれて逢ことなりがたし。于玆この比帯大尽と。廓の換名に唱へつる。北国方の武家のよし。日となく夜となく九重が。許に通ひて全盛をつくすといへど九重は。重三郎が身を案じ。いひ替したることをさへ。反古には

（上・14ウ）

せじと旦暮に。夫のみ胸に塞へては。更に浮たる顔もせず。蔀ぎ勝なる九重を。浮し立んと幇閑に歌妓。または噺家浄瑠理かたり。その餘の藝人引つれて。金に飽せし昼夜の遊び。その上にこの頃は。何思ひけん九重を。揚詰にして傍を離さず。されば重三郎も夜毎に来り。揚屋の辺を立まはり。それが便宜を伺へども。容易顔さへ見ることならず。互に焦るゝ心の裡。千万无量の思ひを察し。揚屋の女児小桜が。重三郎を小子舎に忍ばせ。帯大尽は

（上・15オ）

黄昏より。酔蕩けて寐たるを見澄し。鳥の水汲ふ間なりとも。逢て話しをしたならば。胸は晴ずとせめてもの。心往しになりなんと。粋な捌に両個は歓び。九重は密と来て。泣きつ笑ひつ語るなり。【九】「マア聞なましョ。夫も宜が。どうせ廓に置た日にやア。自己が自由にならねへから。在所へ金をとりに遣た。その金の来次第に身請をするといふことざますが。モシ左様なったら私きやアまア。何様せうかと思ひます」【重】「左様かそりやア大変だ。自己も元の身で居りやア。どんな非道ことをしてなりと。

＊揚詰…特定の芸妓や遊女などを連日独占して遊興にふけること。（『日国』）

（上・15ウ・絵）
源之助

（上・16オ・絵）
源之助／はからずも／島原の／茶坊にいたる
重三郎
こゝのへ

（上・16ウ）
工面をしめへものでもねへが。恥かしながら今の身ぢやア。一両もむづかしい。何をいふも僉金づく。モシ左様なつたら詮方がねへ。帯とやらの所へ往サ」【九】「アイ夫なら左様しませうヨ。お前はんも気楽だねヱ。往サと言てオイソレと。往てしまふ位なら。此様に気は揉まへんは。お前はん夫で宜ざますかヱ」【重】「べらぼうめ自己だツて。宜訳はねへけれど。何様も実に仕方がねへ」ト塞ぐその顔暗がりながら。覗き籠で声曇らせ【九】「私きやア実にお前はんに。配れない位なら。モウこの世にやア居ますまいと。頓から覚悟をして

（上・17オ）
居るけれど。お前はんは何時でも〳〵。何だか浮気だから否だヨ。此方でおもふ四半分にも。思ひなませんから悔しうざます」【重】「イヤ大違へ〳〵。そりやア此方でいふ事た。死ねといふなら今直にでも。一所に死うといふのだから。是ほど堅い証拠はねへ」【九】「夫ぢやア死で呉なますか」【重】「死なねへで何様するものか。今さら其様な疑ぐりを。起すといふがあるものか」【重】「ヲヽ嬉しい夫ならば。どうせ俱にやアならない両個。いつそ今夜死ませう」【重】「そりやア何時でも辞応なしだが。まア俟なヨ是なりで。両個が死だなら。折角粋を通して

（上・17ウ）
呉た。小桜が迷惑しやう。まア夫も構はねへと。した所がノウ九重。身請々々と言たつて。五十や百の金ぢやアなし。縦令帯でも襷でも。左様直に出来るものか。在所へ金を取に遣たと。いふのもほんの掛声だらう。互に死なうと覚悟の上は。何にも急くことはねへ。いよ〳〵身請をされてから。死だツて遅くはねへ。左様すりやア稚さいときから。恩を請た大鶴屋へも。損をかけねへで義も立道理。それまで辞な客人を。会釈のはそれが勉め。シテ見りやア死ぬとは。モウ些伸すが宜。しかし帯といふ奴は。

（上・18オ）
強宜に工面のいゝ客だナ。本の名は何と言て在所は何処だか聞たらう」【九】「在所はたしか加賀だとか。越中とやらのお侍で。本の名はアノウ佐々木。何とかと言ましたヨ」ト聞て此方の源之助。北国にて佐々木を名乗る。さては尋ねる敵の手がゝり。何様いふ人物風体か。見たきものやと思はずも。両腕組で見あぐる二階。暴に階子ばた〳〵〳〵と。繁き人足七八人。矢庭に小子舎へ躍り入り「ヤア大胆奴だ引ずり出せ。大尽さんが揚詰

＊会釈→あひしらふ…適当にもてなす。（『日国』）

の。太夫を偸む大盗賊。ソレ筋骨を抜てやれ」ト各に

（上・18ウ）

嘈々罵りて。重三郎に掴みかゝる。夫と見るより九重が。囲ふ袿裾かい潜り。重三郎は暗紛れ。切戸を開いて外へ出る。源之助は。何卒とて。帯大尽の顔見んと。槙の木陰に身を倚て。内を候ふその体に。「ヤアその盗賊こゝに居た。ソレ打のめせ。敲き殺せ」と。幇閑末社が追従に。捕へて引出す源之助。こりや人差へといへども可ず。上を下へと返しけり

鶯塚千代廼初声初編巻之上終

（中・1オ）

鶯　塚千代廼初声初編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

当下に源之助は。全く人違ひなることを。始めよりよく知れば。手を挙ておし抑め【源】「ア、モシ〳〵お前方は。餘まり麁忽しいぢやアないか。吾儕が何を知るものか」トいへども可ぬ幇閑「ナニ〳〵知らねへとは押が重てへ。自己が旦那の揚詰に。しておく太夫を引ぱり出し。生馬の眼をぬく野郎。たゞの弱冠。彼等ごときに負べきかと。身構をばなしけれど。思へば喧嘩の傍杖にて。対身にならばその却含に。不慮なることも出来やせん願ひある身の妨なり。こゝ等が肝心堪忍所と。思ひかへして手向ひせず【源】「ハテサテ何様も聞釈なし。然し左様おもふなら。吾儕は逃も隠れもしねへ。静によく糺しなせヱ。酒狂のうへか知らねへが。そりやア近曽理不尽だらう」トいへども可ず袖袂を。捕へて矢庭に引ぱれば。かの三

（中・1ウ）

通して遣るものか」ト拳を握つて打かゝる。此方も腕に覚え

（中・2オ）

條にて買たる賤もの。破落離と裂るその折から。駆て出る以前の女。夫と見るより幇閑等を。引除て中に衝立【女】「エ、お前方は何様したんだヨ。眼は顔の看板かヱ。九重さんと話しをしたは。大かたアノ重さんだらう。この方は吾儕がお客。こゝへおまたせ申て置たを。人違ひにも程がある」トいはれて幇閑等勢ひ摧け。たゞ寥々と立たる所へ。徐々出て来る帯大臣が。四辺眹々見まはして「ナニその男は歌妓のお歌が。客といふもチト異なもの。引捕へて一僉議。したらば

（中・2ウ）

直に分らうが。モウ十日とはこの廓へ。おかぬ積りの九重

＊押…自分の意見や希望をむりに通そうとすること。《日国》

＊傍杖…けんかのそばにいて、打ち合っている杖で打たれること。転じて、争いのそばにいたために、思いがけない被害をこうむること。《日国》

なりや。今宵のことは赦してやれイ。サア／＼僉此方へ来い」トいはれて幇閑末社ども。動也／＼属て奥へゆく。彼お歌は源之助に。うち対ひて気の毒なる。面持をして吐息吻き【うた】「誠にモウ馬鹿な事て。さぞお腹も立ませう。先刻のお礼にこゝで一口。あけたいと思ひまして。料理番へ鳥渡した。お肴を頼みましても。取籠で埒があかず。お待せ申て気は急ながら。勝手に居催促をいたしてをると。何だか

（中・3オ）

嘈々騒がしいから。来て見れば今の時宜。ヲヤまア召物が切れましたネ。ほんに無法な生酔ども。怪我でもなさりは仕ませんか。マア何にしろ吾儕の宅へ。お出なすつて下さいましヨ。宿には母も居ますから。何様か仕やうもありませう」ト切戸を開て外へ出る【源】「ナニ吾儕も彼時に。直に帰れば宜つたが。二階の騒ぎの面白さに。聞蕩て居たもんだから。飛だ人違ひで既の■と。ひどいめに逢ふ所サ。しかし吾儕をアノ娼妓の。情郎と間違へられちやア。まア有がてへ釈だけれ

（中・3ウ）

ど。打れちやアたまらねへと。彼是した却含に着服は切れ。何分これぢやア恐れますが。左様かと言てお前の宅で。厄介になるのも気の毒。何卒モシお歌さんとやら。こゝの宅で針を借て。何様にも綴つけて。お呉なさりやア。夫で宜。ナニこれも災難だ。何も立派なものぢやアなし」【うた】「それぢやア吾儕の気が済ません。宅は直に彼処の裏。たつた一足だから直朴にして。何卒来てお呉なさいヨ」ト無理にひかれて裏へ入り。腰障子を開ながら【うた】「慈母やお客さまだヨ。

（中・4オ）

其処を些片付ておくれ」【母】「左様かよく片付て居るヨ。しかしヲヽ火が無なつた。サア／＼此方へ入ツしやい」トいはれて何やら面目なく【源】「ナニお客ぢやアありません。マア慈母さん御免なせヱ」ト上ればお哥は火鉢の傍【うた】「早く消炭を持てお出ナ。其処で此お方はネ」ト小声で今宵の話しをなし。何か訛へて遣る容子【源】「モシ何かお世話があつちやア。何様もお気の毒でございます。鳥渡この切れたのを。繕ろってお呉なさいナ」【うた】「そりやア今に慈母が。直よくしてあげますから。

（中・4ウ）

マア落着てお出なさいヨ」トいふをり母は下駄の音。高やかに路次を出る【源】「ほんに何かお心配が有ちやア吾儕は困りますぜ。アヽ早く皈れば宜かつたに。優々として居るから。人さまのお世話になる」【うた】「アレサ御馳走は出来ませんが。誠にお前様は心意気の。憑もしいお方だから。嬉しくツてなりませんは。夫だから只一口あげたいと思ひますのサ」【源】「それが何様もお気の毒だヨ。お前の落した釈だから。拾ってお前に

＊居催促…その場にすわり込んで、しつこく催促すること。（『日国』）

あげたのが。何も憑もしい訳もねへ。当然ぢやアありませんか」【うた】「イヽヱ

（中・5オ）

左様でありません。此様な能もない物だけれど。これでも
沽りやア三両や。四両にやアなりませうサ。夫を拾つて何処ま
でも。逐かけて来てお呉なさる。御真切と正直な。所に私は迷ひ
ましたは」ト了得哥妓のことなれど。惚れた心は素人も。かはらざる
にや恥かしさうに。顔を反けてさし俯く。この時母は帰り来て
【母】「お哥や今来るヨよく火でも発しなせヱ。まアお前様
はれば。飛だ馬鹿な人間違。お怪我でもなさらないで。誠
に宜ございましたネ。御存はありますまいが。アノ帯さんとかいふ

（中・5ウ）

おうたが母
不測の因縁／源之助／お哥が／家に／泊る
おうた

（中・6オ・絵）

源之助

（中・6ウ）

お方は。何様いふ御身分かお金持で。この頃大鶴やの九重さん
に。墜落て毎日のやうに。お通ひなさるが幇閑も。常に御恩に
なりますから。彼方のことゝ申すと。ホンニ刀祢さまか何ぞのやうに。
お軽薄をしますのサ。九重さんはまた重さんといふ。深い
お方のあることは。世間でもよく知つて居ますが。何だか餘
まりの遣ひ過で。御勘当になつたとか。それで今は表はれ
て。逢はつしやることも出来ず。お互に気を揉で。居なさると
聞ましたが。今夜は誰かゞ幕を切て。密そり逢したと見え

（中・7オ）

ますが。夫が知れると直その通り。夫でもマア重さんが。よく早く
逃なすつて。格別な騒ぎにも。ならないで宜ございました。その
代りに御迷惑を。なすつたはお前様。どれ〳〵私が出来ない
ながら。何様か繕つてあげませう。ヲヤ〳〵これは餘ほど切れ
た。こりやア召てお出なすつちやア。縫憎うございます。アノ
お哥縫あひだ。何ぞお貸まうしなゝ。と言た所が女の物。しかし
お寒くさへなけりやア宜」【うた】「夫ぢやアお気味が悪しとも。吾
儕の胴貫をお着せ申さう」【母】「ムヽそれが宜サアお前様。

（中・7ウ）

荷旦これをお召なさい」【源】「こりやア種々〳〵ありがたう。然し
此様な立派なもんぢやア」【うた】「ナニ何処が立派な物かネ。サア〳〵
早くお着更なさい」ト帯をくる〳〵引解き。かの胴貫を
着せ更て【うた】「ヲヤ誠によくお似合だ。大かた何処のか娼妓のを
借て。寝衣におしなすつた事もありませう。憎らしいネ」ト
小声でいひ。腿のあたりを軽く爪る【源】「アレサ悪笑もんぢやア
ねへヨ」トいひつゝ母の方を向き「そんなら何卒御面倒でも」【母】「

ハイ宜ことは出来ませんが」ト行灯ひきよせ眼鏡をかけて。

（中・8オ）

縫にかゝれば源之助は。火鉢の際に居るを見て。お哥はひつたり身を倚添ひ【うた】「お前様のお宿はしりませんが。今夜は餘ほど遅いから。こゝへ泊つてお出なさいナ」【源】何様もそれまでお世話になつちやア」【うた】「アレ好ねへお否かヱ」【源】「ナニ些も否ちやアねへが」【うた】「お内室さんが待てお出か」【源】「ナニ其様なものはありませんが。始めて来て左様種々。お世話になつちやア気の毒だ」【うた】「ヱヽばからしいお前様も。誠に遠慮深いねヱ」ト源之助が将指と食指を確かり握る。折から「ハイお誂へ」ト聞て母は針線をおき【母】「

（中・8ウ）

大分手間がとれたつけノ」トいひつゝ夫を運び入れ【母】「お哥火が発つて居るかヱ。鍋は直にかけるが宜ヨ。燗酒瓶や猪口や箸は。其処の膳の上にあるヨ」【うた】「アイヨ。そりやア宜がこれちやア暗いネ。アノ慈母お前の方へは。燭台をつけて行灯は。こつちへ借てお呉でないか」【母】「アヽそりやア何様でも宜が。其方は燭台の方が宜らう」【うた】「餘まり明る過て恥かしいネホヽヽヽ」【母】「マアそれでも女だノ。恥かしいことを知つて居るかヱ」【うた】「アレまア彼様ことをいふヨ。わたしやア其様に馬口連かねヱ」【母】「全体左様ぢやアないけれど。

（中・9オ）

近曽この活業を始めてから。滅吉利と厚面皮。誠に人が悪くなつたヨ。アノお前様お聞なさいまし。始めてお目にかゝつたお方に。棚卸しでもございませんがネ。私共も前方から。此様な身でもございませず。鄙でこそあれ相応に。田地も持てをりましたが。是の兄が放蕩で。大借金を拵へましてネ。跡へも先へも往なくなつて。漸々目が覚たかいたして。これまでは心得違で。誠に恐れ入ました。モウ是からは改めて。放埒はいたしません。併ながら田地田畠。みな書入にいたして見れば。取る所は些もなし。

（中・9ウ）

どうでこの土地には居られぬ私。是から他国拝をいたし。五年が内には槍一筋の。侍になつてお目にかける。何卒夫まで両個は。こゝに居て糸機か。賃針線してなりと。煙を立て居て下されと。夫は／＼涙を流して。実に先非を悔んだ容子。夫なら其方の思ふやうに。一骨折て見たが宜。先祖からして居る土地だ。何をしてなりと母子両個で。暮されないことはないと。出して遣て跡で両個が。貧しいながら鄙は気楽。どうかかうかして居るうち。モウこのお哥も十七八。苦しい中

（中・10オ）

でも浄瑠理から。三弦までも仕込みまして。ヲヤ鍋が煮詰つたヨ。お哥はやく湯をおさし。面白くもないお話で。御酒のお邪魔

＊煙を立て↓けむりを立てる…炊煙を立てる。生計を立てる。口すぎをする。『日国』

をいたしました。まア一ツあげませう」【源】「モウ吾儕も大きに酔ました」

第四回

【うた】「慈母モウその話しは。宜にしてお仕舞ナ」【母】「左様さノウ人さまに。まうした所が何にもならずと。思ふけれどお前のことから。竟暗り出したはネ」【源】「しかしこれ限ぢやア気にかゝる。夫にお哥さんが十七八の。花盛りの往たてを。聞ないぢやア残念サ。夫

（中・10ウ）

から慈母さん何様しなすつたヱ」【母】「モウ止といひますから」【源】「なにサ止ずとお話しなさいヨ」【母】「それからネお前様。邑の若い者が世話をして。稽古所を始めまして。賑やかでありましたが。荘屋の小旦那が色男振て。餘まり威張たもんだから。大揉が出来て若い衆が。倚てかゝつて小旦那を。半殺しに打ましたアな。其処で荘屋さんが大に発憤て。既のこと牢往の。二三人も出来る処を。大勢人が這入て。やう〳〵内済にやアしましたが。元はといへばお前方の。稽古所から起つた事。斯して居ても

（中・11オ）

よくあるめへ。一年なり二年なり。何処ぞへ往て居るが宜と。世話アする人が言ますから。そりやア誠に迷惑だと。言ちやア見ましたが長ヱもんにやア。捲れろといふ喩へもある。何でも左様するが宜と。為を思つて言て呉る。その人の顔も潰されず。夫から住だ家屋しきは。邑内へ預けて置て。何処へといふ宛もないが。この廓にやア懇志な人が。二三名ありますから。爰へ参つて

（中・11ウ）

侍んだ所が。夫なら歌妓になるが宜。鄙に居て師匠をするより。幾干宜か知れやアしないと。この活業を始めまして。モウ丁度足かけ三年。其処で兄が左様言た。五年も済だが立身は。口でいふやうには往まい。併し何処に居るといふ位は。知らしても宜さうなと。何ぞといふと是と両個で。申て居ても一向沙汰なし。先頃風の便りで聞ば。河内鳴野とかいふ所の。郡司さまに奉公して。至極旦那の気に入て。牛の願ひも鼻とやら。モウ些で御引立に。ならうとした処を運の甲斐なさ。旦那のお供で吾嬬の方へ。下る途中で旦那は殺され。剰へ御用のお金を。二千両とか盗まれて。言釈なさに

（中・12オ）

腹を切て。死だといふ噂を聞。正真ならば大変と。種々にして聞ますけれど。モウ彼是一年たらず。実正が分りません。放蕩をする時分には。いつそ死で仕まへば宜と。憎くツてわが子ながら。ほんに愛想が竭ましたが。目が覚て辛抱し。そのうへ旦那が不慮の始末。いひ訳なさに腹を切たと。聞て見ればまた可愛そう。箇様まうすと手前の子を。賞るやうで見ツともないが。高が性れは土百姓。侍になつて立身すると。思ひ着た程あつて。当

＊往たて…物事が成立するまでの経路。事の次第。経緯。いきさつ。いくたつ。（『日国』）

下に腹を切とは。心までが侍に。なり切たりヱ気健な奴と。嬉し

（中・12ウ）

くもありまた悲しさ。お察しなすつて下さいまし」ト不問語をきく源之助。さては松原作右衛門は。このお哥が兄なりしか。是は誠に不測の因縁。思へばほんに水性を活る。歌妓活業なればとて。今夜始めて顔見し此身に。斯馴々しく物いふは。何様した事と底気味悪く。思ひたりしが攷れば。作右衛門が引あはせり。然らば残らずうち明て。語らんとも思ひしが。左様したならば。母諸共。こゝへ呼とか引取とか。却て母子に苦労かけ。此方にもまた都合が悪し。まづ〳〵今宵はしらぬ顔。母にも話し

（中・13オ）

当議して。後日にいふとも遅くはなしと。胸に収めて太息吻き

【源】「そりやア苦労をおしなすつたネ。併し兄さんのその噂は。何処からお聞かしらないが。亦伝の噺しにやア。間違ひも沢山あるもの。アノ松原。イヤナニ待となりやア気の迷ひで。種々に考へる。まさか左様した訳もあるめヱ。併ながら家屋しきまで。持て居ながら其処にも居られず。斯して朝晩お客の機嫌を。取て居るのも馬鹿〳〵しいネ。然けれど甘美ものは食飽き。美着物は働き次第で。着るといふは鄙より。また結構なこともあるはサ」【うた】「夫ますヨ。私始め哥妓衆が。僉平気な顔をして。面白さうに騒いで居ますが。何様して〳〵内証の幕は。他に見せられは仕ませんは」【源】「左様かネ何だか脇からア。気楽らしく見えるがネ」【うた】「夫だから猶怨襟のサ。アヽ〳〵噺しが理に陥て。何だかお酒にも酔なくなつた。モウ〳〵其様な話しは止て。些お猪口をはやらせませう」【源】「吾儕は全体一向いかずサ。所が今夜はお酌に浮れて。竟大きに飲過た」【うた】「フン甘くお言なはる。浮れ所が

（中・13ウ）

がお前様さう往ば。何も苦労はありませんが。誠に骨がをれ

（中・14オ）

違ひませう。何でもお前様は見まうした。お方に違ひありませんが。何処ぞにお馴染がおあんなはるだらう。些噺してお聞せなはいナ」【源】「イヤ大違へ〳〵。馴染所かこの廓は。来たのも今夜が始めてサ。全体吾儕は大坂の。片ツ端に居るもので。餘まり近くもないからネ」「ヲヤ左様ですかヱ。それにしちやア。また何しにお出なすつた」【源】「ナニ些用もあり。それに序ながら尋ねる人もあるが。モシこの廓に葛藤て。居るだらうかと思つてサ」【うた】「その葛藤て居るかとお言のは。何様な人でありますヱ。

（中・14ウ）

男藝者かまた娼妓家の。奉公人でもありますか」【源】「ナニ〳〵其様な者ぢやアない。実はその人の顔も名も。知らないから空なもんだが。左の小鬢に兀があつて。右の手の小指がないのを。証拠にして尋ねるのサ」【うた】「ヲヤ左様かヱ」ト考へたりしが。帯大尽と呼るゝ客にも。折節出たことがある。今思へば左

の小鬢に。五分ばかりの兀があり。小指のことは気が着ねど。若もそれにはあらぬかと。思ひながらも定かならねば。聞さして跡はいはず」【うた】「モシまた其様な人を見かけたら。

（中・15オ）

直知らしてあげませう」ト話しながらに飲む酒も。七八分の酔心。このとき漸々繕ひ出来て【母】「まア〳〵これで見ツともなく。ないやうにはなりました」【源】「これはモウ有がたう成ほとこれぢやア一向しれない。ドレ着更やう」ト立にかゝるをお哥はとめて【うた】「モウお前様どうで帰るとは出来ないから。泊りとお極なさいヨ。左様すりやア着かへずとも。是を直に寝衣になさいナ」【源】「実にこりやア立派すぎて。着てゐるのも心配だ。若汚しでもすると悪い」【うた】「ナニそ

（中・15ウ）

りやア構ひませんが。左様お思ひなはるなら。この着服になはいナ」ト刷々の下着を出す【源】「夫ぢやアこの方をお借申さう。サア慈母さん一ツおあがり。併し誠に給べあらして」【母】「ハイ〳〵是から頂きませう。彼も折角左様申ますから。爰へお泊りとなさいまし」【うた】「モウお草臥だらうから。床を敷てあげてお呉ナ。どうせ此様に狭いから。押付合て寐るが宜。アヽ吾儕も大きに酔た」【源】「ナニお前より飲得もしねへで。吾儕が大造飲ました。夫ならお世話になりませうか」【母】「

（中・16オ）

左様サ〳〵お休みなさい。しかし蒲団や小褄が。汚れてお気味が悪からう。随分借れば奇麗なのも。ありますけれど【源】「ナニ〳〵これが結構サ。それぢやア吾儕は【うた】「アヽ其方へお休みなはい。私きやアその脇へ寐ますから」【源】「左様かそんなら御免なせエ」ト寐れば其処等を片付て。母子も倶に憩みけり。かくてその夜も明ければ。母は起て火を焼つけ。茶を拵へて朝餉をすゝむ。当下お哥は源之助を。熟視るに身形こそ。窶々しくはありながら。色白くして眉秀。

（中・16ウ・絵）

源之助

（中・17オ・絵）

母の／遺書を／見て／源之助／悲歎に／迫る

（中・17ウ）

夜見しよりは鮮明に。一段増る人品骨柄。惚々として帰すのは。頻りに辞とおもへども。然りとて何処の何人か。それさへ知らで駐むべき。よしもなければ端なき。世の在さまを心に感じ。若その人に心があらば。これ限りにもなるべからずと。名残惜さは弥増ども。「はや帰らん」といふまゝに。「また〳〵近きに尋てよ」と。思ひを含む暇乞。影見ゆるまで見送りて。お哥は裡に入にけり【母】「ノウお哥彼人はお前は何だらう

と思ふ。町人でなし農夫でなし。何でもありやアお侍の。零

（中・18オ）
落たものだらう。しかし年は往ないが。中々発明な性質。なんだ大坂の片ツ端に。居なさると言たツけノ」【うた】「左様サ吾儕もさう思ふヨ」【母】「たゞ可咲はこの廓に。葛藤て居る人を尋ねる。名もしらないが顔もしらない。兀があつて小指のない人と。何様いふ訳か異ぢやアないか。絵草紙か読本なら。敵でも索ねると。いふやうに聞えるが。まさか左様いふ事てもあるまい」【うた】「何様も夫はわからないが。アノ帯さんといふお客の。たしか右の小指が異だと。思つたけれど袖口で。

（中・18ウ）
甘く隠しなさるからよく知れなんだが。彼人ぢやアないか知らん。今回お座しきへ出たら気を着て見やう。昨夜も夫を話さうかと。思つたが滅多なことを。言出してもよくないと。思つてまア無言て居たのサ。若左様ならば何の訳だか。今回来なすつたらよく聞う」ト母子倶々噂して。また来る日をぞ俟にける

鶯塚千代迺初声初編巻之中［終］

（下・1オ）
鶯塚千代迺初声初編巻之下

東都　松亭金水編次

第五回

並松の風蕭然として。淀の河浪岸をあらび物凄き封疆の傍。竹の柱のそのまゝなるに。まづその無事を歓びて。足をはやめて源之助。入口の菰まきあげて。内に入ながら【源】「只今帰りました。斯して五六日出歩行ても。さぞお淋しからうと思つて。気になつてなりません」トいひつゝ

（下・1ウ）
狭き小屋のうち。筵屏風をひき除ても。何処ゆきけん母は居ず。四方を見るに火の気もなし。鍋の下さへ昨日今日。焚たるさまにあらざれば。心頻に顚倒し。小屋をたち出東西南北を。眼の遣くたけうち見やれど。夫かとおもふ影もなし。何様いふ事と驚けど。誰に問べき人もなく。途方にくれて思案もつかず。然ながらまづ火を焚んと。落葉かき寄せ燧をとり出し。燃つけて其処に跪み。ただ惘然と魂をも。抜れしやうに覚えつゝ。

（下・2オ）
霎時ありて此方を見るに。源どのへ母よりと。書たる文のあるを見つけ。取揚ておし戴き。披くその間も心は急れ。封おし切て読下すに

さてもわれ〳〵運拙なくて。かくばかり零落はて。命のあれば恥もあり。いつそ死でとその比より。たび〳〵

思ひ詰ながら。人並をえしそもじの孝行。若もこの身が死だなら。思ひに迫り過もありやしなんと惜からぬ。みを存命てけふまでも。そもじの枷となり侍り

（下・2ウ）

しが。よく〳〵おもへばこの身ゆゑ。そもじの体も自由にならず。彼大望の妨の身。さらに助けとなることなし。かくて月日を徒に。過すは爺御へ不孝なり。因て此身は覚悟を究め。渕川へ身を沈め。夫婦は二世と聞からは。早く爺さまのお傍へ参り。都てのお話しするのが楽しみ。そもじは其身を大事にして。心にかゝる妾なければ。天を翔り地を走り。一日もはやく本望とげて。修羅の妄執を晴させ申すが。子

（下・3オ）

たるものゝ道ときく。然ながら尾羽うちからし。今日の便寸もなきゆゑに。よく前後に心を配り。宜しきに就き憑もしき。方人あらばそれをさへ。頼むもすべて智恵ぞかし。是等のことは申さずとも。兼て承知のことながら。まだ年若きそもじゆゑ。血気にはやり仕損ふ。ことやあらんと往末を。ふかくも案じ愚なる。心のほどを書遺す。母が今盤の繰言を。よく〳〵念じ宜しきに。就くといふと

（下・3ウ）

くれ〴〵も。心に忘れ給ふなよ。猶いふ事は荒磯海の。浜の真砂の尽しなけれど。心いそがれ候まゝあら〳〵書遺し参らせ［まゐらせ候］かしこ

母より

源どのへ

と読畢りて狂気のごとく。餘りのことに涙も出ず。蹉陀しつゝうち歎き。倒れ伏しまた合破と起て。前後不覚の体なり

（下・4オ）

しが。良あつて心着き。日附なければ何時なりや。それは知らねど渕川と。すれば間近きこの淀川。若も死骸のあらんかと。躍り出して乱杙や。また枯芦を掻わけて。探せど更に知るよしなし。日暮て泣々たち帰り。さて不測にも作右門が。妹に逢たる物語。それに就てもこの後の。ことを商議なすべしと。廓を出しよりまだ他に。往べき所へ得もゆかず。足をはかりに帰ればこの時宜。世の楽しみも苦しみも。親と倶にあればこそ。取遺されて何かせん。我も倶々

（下・4ウ）

この河へと立揚りしがイヤ〳〵〳〵。夫ては母の心に背き。また誰あつて父の恨みを。晴らす人のあるべきぞ。血気にはやり過の。あらんを案じ給ふとは。即こゝのことならんと。忽地心をおし沈め。平常母の起臥する莚屏風のその中へ灯火を供へ

坐を組で。「南無精霊頓生菩提」と。終夜に念じつゝその夜も明て思ふにははやこの小屋も用なきものなり。推破りて河へ流し。この身はこれより所も定めず。遍歴して敵を索ねん。さりながら図らずも。昨夜風に聞はつりし。帯大尽は本

（下・5オ）

名を。佐々木といふと太夫が話し。殊にはお歌が母の話しに。身分は定かならねども。何様した訳か金持と。聞さへこれも耳倚なり。夫等を探る究竟の。手がゝりはお歌なり。今よりゆきて作右衛門が。一伍一什を委く明さば。夫ゆゑ死だ作右衛門。かの母子が為にも敵。些も疎略はあるべからずと。大かた思案を極たるが。イヤまて霎時と胸に手をあて。七人の子は生すとも。女には心許すなと。むかしよりの誡めあり。昨夜の話し。一点ばかりも。偽言なしと思へども。広い世界に似た事の。なしと

（下・5ウ・絵）

〈画中〉孟齋

おいく

おうめ

切に問れて／お梅／心中を／かたる

（下・6オ・絵）

〈画中〉芳虎

〈画中〉錦朝楼

（下・6ウ）

斗りはいひ難し。モシそれにもせよ母子の心を。見定めもせず。瓢蕩と。大事を明し若万一。彼方の耳に入るならば。害を曳出すこともやあらん。まづ〳〵旦く容子を探り。その上の事とせん。夫のみならず母うへの。世を去給ひて日柄もたゝぬに。敵を探る手術とは。いふものながら彼処へゆき。女の身に近付んは。人の子の道ならず。さらば中陰の果るまで。こゝに居て日を送らんと。心決して小屋に居り。少しの糧のあるほどは。外へも出ず念仏して。菩提を吊らふ他はなし。偖この

（下・7オ）

話説分両頭。長柄長者が女児なる。お梅はいかなる縁しにか。不図源之助を見初しより。心頻りに悸きしが。人の見るめも蔚悒くて。残り惜くもその日は帰り。また一両日過て後神明へ詣たしと例の供人ひき連て。出るもそれを見たきゆゑ。はやその場所に近づけば。其処等に居るかと駕の中。左右の簾をまきあげて。見れども絶てその人なし。こゝに望みは失なへど。また奈何とも詮方なく。戻り路にもそのごとく。徒に帰り来て。其夜寝れども眠られず。たゞ

＊話説分両頭→はなし二つに分かる…江戸後期の読本などで、別の話を始める際に用いる表現。話は別のことになるがの意。（『日国』）

（下・7ウ）

その俤身に副て。実に不思議とおもへども。何様したことか束のまも。思ひ忘るゝ間はなし。度々ながら堪かねて。願篭したりと偽りて。また神明へゆきけれど。その俤を見るよしなし。以あるかな源之助は。花洛へとて往たる迹なり。さればいよ〳〵恋焦れて三回の食さえ甘美からねば箸はとれども食ぬ日多く。されば渾身も何となく疲れ果て心地悪しと。枕に着ぬ日とてはあらず。兼て出入の医師さへあれば。脈を視腹を探りても。これぞとおもふ病は

（下・8オ）

見えず。世にいふ恋の煩らひと。誰も知らねば加持祈祷頻りに医者を換などして。長者は只管苦に疾から。妻のお牧は継しき中。殊には何卒死ねかしと思ふばかりの事さへあれど。良人の前へ捨てはおかれず。表向のみ彼是と。世話するさまに見せかけたり。妹のお花侍女お幾は。旦ても暮ても傍を離れず。食事を勧め。薬を暖め。信実つくす介抱も。さらにその験は見えず。僅の日数を過すまに。眼は陥凹み頬骨は。高く見はれ掌の。肉さへ脱て今はしして。些ア物を食が宜。左様しないと疾ばかり。亢ぶつて快はならないぜ。コウ〳〵お花自己が居間に。見舞に貰つた菓子がある。彼をこゝへ持て来な【いく】「ハイそれは私が」【長】「ナニお花でも宜夫よりか。其方は足でも摩つてやれ」【いく】「数回も左様申ますが。お体へ手を着ますと。却て悪いと被仰ますから」【長】「フム

（下・8ウ）

はや。この世の人とも思はれぬ。ばかりに寥れ果たれば。長者は愁ひ歎きつゝ【長】「何様だお梅些何ぞ。給て見る気はないか。何を遣ても頭振をふつて。塞いで居るが我慢を

（下・9オ）

夫ちやア詮方がないノ」トいふ内お花は菓子折を。重た気に持来り【花】「老爺さんこれでございますか」【長】「ヲヽそれだ〳〵其様に重いか」【花】「ハイ重うございます」【長】「水引を解て蓋を開な。アヽこりやア誰かゞ左様言た。辻浦の新製で。蒸菓子へ極彩色の。絵を描たといふ奴だ。ムヽなるほどこりやア奇麗だ。コウお梅これを見な。何と種々器用なことを。工夫して拵へるノ」【梅】「ハイ有がたうございます。ヲヤほんに奇麗でございますネ」トたゞ一眼見たばかり。その侭に眼を閉れば【長】「どうも

（下・9ウ）

困るノ珍らしいから。一ツ食て見やうといふ。気があると宜けれど」【花】「ヲヤまア種々な絵がございます。此方のは足利絹の。合巻にございます。八重梅の所へ光仲が。通ふ所でございますねエ。この琴の糸なぞまで。よく斯奇麗に描ますねエ」【いく】「ヲヤほんにお花さまこの隅のを御覧じまし。鬼一法眼の菊

＊継しき中→ままし…継父・継母・継子または腹違いの間柄である。『日国』

畑サ。田之助が皆づる姫。座元の牛若もよく似ました。斯いふ細かい似顔絵は。誠に珍らしうございます」ト評はすれともモウ一眼。お梅はこれを見ん。ともせず。死を俟ほどになりにけり

（下・10オ）

第六回

長柄長者は病細りし。女児の顔をうち眺望【長】「何だか何様も容子が気障だノ。若くて死ぬも定業なら。是非がないとはいふものゝ。只両個の娘の児。むかしの歌に黄金より。白銀よりも子に勝る。宝はないと万葉集にも。載てあるが実に左様ヨ。自己も世間で長者といはれ。金に不足といふはないが。幾干金が有たとても。子がなけりやア塵も同然。お花一個と成て見れば。誠に心細い訳だ。モシ金

（下・10ウ）

づくでこの病気が。快なることなら万両の。金を積でも措くはないが。阿育王が七宝でも。寿命を買ことはならぬといふ。世間はアヽ是非もない」ト一人呟き寥々と。己が居間へ帰りゆく。是を聞居るお花とお幾。その心根をおし量り。不覚に涙を浮めつゝ。倶に消いる心地なり。其日も暮て亥の刻頃。今宵はお花を先へ寐かし。お幾は一人火鉢の炭を。つぎ直して居る時に。お梅は苦しき息を吻き【梅】「けふ老爺さんが被仰にも。金づくで癒るなら。万両でも惜くは

（下・11オ）

ないと。ホンニ親なればこそ夫ほどまでに。思し召て下さるかと。わが身ながら体ぢうが。縮むやうに恐ろしい。何卒吾儕も快なつて。御安心させ申たいと始終思つて居るけれど。何の因果かこの通り。段〳〵弱つて往ばかり。モウ長いともあるまいが。モシ吾儕が死だなら。老爺さんはいふに及ばす。お花さんやお前の歎きが。何様だらうと思はれる。シタガお幾よくお聞。親より先へ死ぬものは。不孝な子だと世間の喩へホンニそれに違ひないから。よウ〳〵老爺さんにも

（下・11ウ）

左様申て。餘まりお歎き遊ばすなと御異見を申ておくれ」トいふさへ息もきれ〴〵なり。お幾は聞て眼に潤む。泪を拭ながら傍へ倚り【いく】「何様も貴嬢の御病気を。変だと私は思ひますヨ。お医者さまの被仰にも。「彼して毎日御膳もあがらず。塞いでばかり入ツしやるから。お疲れは参る筈。いはゞ断食の人も同前。あの分で日が重なれば。実にお命はむづかしい。其処でお病は何様だといふと。是と極めたこともなし。マアいはゞ何処とつて。何ともないと言やうな。吾儕どもゝ

＊阿育王が七宝でも…人間の命のはかないことのたとえ。阿育王は、インド最初の統一王朝を築き、仏教を保護・宣伝した、マウリヤ朝第三代のアショーカ王のこと。『童子教』に「阿育之七宝、無買於寿命」。

（下・12オ）

数年来。医者を家業にして多くの病人を。手がけたけれどこのやうなは。嘸しに聞た事もない。実に合点が往ない」と熟々と左様被仰ました。シテ見ると私が。頓から万一箇様ではないかと。気の着た事がありますけれど。何ぼ斯してお傍に居ても。申し憎さに口へは出さず。たゞ御容子に気を付て。居るばかりでございますが。貴嬢何かお心に。深く思し召ことがございませう。夫が御病気の根となつて。此様にお窶れなすつたのだと。私は存ますが。大かた違ひはあり

（下・12ウ）

ますまい。若左様ならばうち明て。斯々だと被仰ましナ。旦那さまもあれほどまでに。被仰ものをお命さへ。扶かる事なら何様な事でも。思しめすやうに成ませう。それを無言て入しつて。若もの事がございましたら。夫こそ貴嬢の被仰通り。御不孝でございませう」ト縡をわけ理を責つゝ嗤で哺めるやうにいはれ。お梅はいとゞ恥かしきや。顔を隠して物いはず。お幾は気色を見てとりて。いよ〳〵左様と思ふにぞ。横の襟をひき捲り【いく】「ホンニ貴嬢もこれほどまでに

（下・13オ）

申すことが分りませんか。何でも深くお心に。思し召すことがあるに違ひない。サアそのことを被仰まし」と。切に問れて土息吻き【梅】「モウ翌死ぬまでもいふまいと思ふけれど。縡をわけて信切に。言て呉るお前の心を。無にするも気が済ず。左様かと言てこればかりは。誠に言憎い訳だけれど。先頃神明さまへお参りのとき。唐琴が浮雲ない所を。助けて呉た乞食の男。此様な身形はして居るが。アヽ何処やらが好た風だと。不図思つたが始まりで。朝に晩にその人の。顔かたちが眼さき

（下・13ウ）

に粲然つき。これは何様した気の迷ひか。馬鹿々々しい乞食なンぞを。好と思つたツて何様なるものか。アヽモウ〳〵そのことは。思ふまいと手前の心で。嗜なんで見ても何の因果か。その事ばかりが気になつて。物ごとも手に着ず。其処で吾儕が明らめたは。所詮何と思いたツて。詮方はない先は乞食。餘まりの事で人にもいはれず。何卒モウ思ひきらうと。思つても身に属纏つて。忘れることのならないのは。何でも因果に違ひない。左様とてみれば死ぬより他に。詮方はないと心を究て。覚

（下・14オ）

悟してから御膳も給ず。だん〳〵此様に弱つて来たは。吾儕の願ひが協ふ時節と。実は嬉しく思つて居るが。左様とはしらぬお両親。またお両方の歎きを察して。釈を一通り言て聞せる。併この事はお前ばかり。誰にも言て呉なさんな。吾儕がいよ〳〵死だ跡では。箇様であつたさうだ位の。噂嘶しにしておくれ」ト瀾然と泣て語るを聞。お幾も涙を推拭ひ【いく】「私も左様だらうかと。七八分は察しましたが。餘まりな違ひやうで。貴嬢箇様ではござい

ませんかと。申すも何だか不躾らしく。困りきつてをりましたが。

（下・14ウ）

左様承はつて見ますれば。何のまア夫だつて。仕様のないことはございません。釣合ない者を夫ほどまで。思し召を因果と明らめ。死でしまはうとの御覚悟。貴嬢のお身では御尤。いかさま左様でございませうが。人の身にとつて死ぬといふ程。大変なことはございません。畢竟生て居ればこそ。嬉しい悲しい憂い怨襟。また義理が済のすまないのと。種々なことがありますけれど。死んでは実も蓋もなし。長い浮世もまづ夫限り。まアそのことは私に。お任せなすつてお気長に。死なゝい工夫を遊ばしましヨ。乞食非人と

（下・15オ）

一口に。申すけれどその中には。よい人が薄命で。そのやうになるものもあり。それ昔の噺にも。敵なンぞを冤ふ為に。乞食になつたり癩病疾の。やうになつて居る人もあります。知らないで脇から見ると。たゞの乞食だと思つても。先はなか〳〵左様でなし。先頃のアノ乞食も。取廻しといひ詞つき。当然の者ぢやアないと。私は見てとりましたが。何でも彼は訳のある。乞食に違ひございません。左様して見れば万一して。思しめし通りに参らないと。いふこともございません」【梅】「左様いへばさうでもあらうが。鳥渡一回見た

（下・15ウ）

〈画中〉■茶

〈画中〉休所

忠太夫

掛茶屋／に／来て忠太夫

（下・16オ）

乞食の／容子／を／聞く

（下・16ウ）

物貰ひに。惚るといふ淫奔もの。長柄長者の面汚しと。人に指さし笑はれては。縦令願が協つても。生て居る甲斐はない。夫よりか是なりに。死でしまふ方が宜」ト頻りに瞼を潤ほす景勢。お幾は何といふよしも。なか〳〵に痛はしくて。倶に袂を絞りしが。佶と心着くことありて。その夜の明るを遅しと俟。その父なる忠太夫は。長者が家の老生管。因てお幾は昨夜のことを。細々とものがたり。如何せんといふにより。忠太夫は聞敢ず。さて怪からぬその様な。事とは思ひ着ざりしが。世に珍らしき事

（下・17オ）

の次第。主人長者にいふたりとも。たゞ不便と思はるゝまで女児の命をいかやうに。助けたいとてこの家へ。乞食を聟に取れうか

＊癩病…ハンセン病をいった語。現在は用いない。『日国』

＊取廻し…身のこなしや風体。たちいふるまい。『日国』

＊老生管〜重手代…手代のうちで、かしらだった古参のもの。『日国』

然れどおぬしがいふ通り。よい人の零落か。何ぞまた深い訳のある人かそれも知れず。條によつては乞食一非人に。なり下つても大事ない。まづ〳〵それが容子を探り。さて其上で主人へもいふて見やうと夫よりして。朝に晩に彼処へゆき。掛茶屋などに腰うちかけ。便宜を以てかの乞食の。来歴を索ぬるに。たゞ鼻の先のことにさへ。人の口には間違多し。況て乞食の往たてを

（下・17ウ）

よく知る人のあらざれど。大方これをしる人あり。元は然るべき武士なりしが。父を討れその家断絶。ぜひなく乞食になりしといふ。この頃までは母と両個で。かの並松の下に居りしが。母は何方へ往にけん。今はその身独となり。稼に出たり出なんだり。大かたは小屋に居て念仏を唱へ経を読み。あるよしを篤と聞。さてこそお幾が眼鏡にたがはず。宜しき人の身の果なり。さらば長者に物がたり。計らんものことその夜さり。云云のよし長者にかたれば。長者は呆れて物さへいはず。任意武家の果にもしろ

（下・18オ）

今は路頭の宿無し乞食。なんぼ女児が不便さに。命を助けて遣たいとつて。聟にする訳にはいくまい。左様して見れば遠からずお梅は死ぬであらうけれど。実に自業自得といふもの。是非がないと口ではいへど。また恩愛のやるかたなく。涙を瀾然と流すを見て。渾家のお牧は傍へより。「一々御尤ながら。ノウ忠太夫まだ二十にも。足ない女児を看為々々見殺し。夫よりかそれほどまでに。思ふ男に配して遣り。根が武士だとかいふ事だから。夫ほどの器量があつてこの跡が嗣れさうなら。それに越た事はなし。モシ

（下・18ウ）

また役に立ないものなら。お梅と両個逐出して。貧しい暮しも好と好なら。死だには遥に増。たゞ外聞がよくないと。いふ所は人一個の。命に換て我慢をするサ。夫より他に仔細はないこと。こりやア忠太夫篤りと。御商議のうへ左様して遣りやれ」と。例にかはれどお梅が身を。痛はり貯ふ信実心。忠太夫は点頭て頻りに主人が心を解き。聟にせんとぞ勧めける

鶯塚千代廼初声初編巻之下［終］

（上・ロ1オ）

黄鸝塚千代迺初声二編叙

世の中は食てはこして寐て起て。跡に残るは骸と證文とは。むかし誰やらが口荒み。いとおもしろきざれ歌なりかし。余が輩既に一本の。切筆を以て耕し転り。是より米穀塩噌魚肉。野菜は勿論衣類調度もみな此筆を耕すの。田畑よりして生ずといふも。

＊世の中は食てはこして寐て起て…「よの中ハくふてはこしてねておきて／さてそのゝちハ死ぬるばかりよ」（噺本大系本文データベース『一休はなし』より）

＊はこして…大便をする。（『日国』）

（上・ロ1ウ）
実に泰平の御恩徳。有難しと申スもなか〳〵。
さて斯の如くして。数年来送ツたうへで常
ならぬ。風が誘へばお暇の。其時残るは前に云。
骸と証文ばかりてなく。かゝるはかなきものな
がら。遺稿と唱へて出す時は。まづ一旦は行なはる。
強　佳作の謂にはあらねど。六十年来髭面を恥も
やらずに押強く。綴りし書の多ければ。自然人聞

（上・ロ2オ）
知りて。金水ならば見てやらうと。云れるだけが
此身の一徳。元来文盲無智短才。よかろう
筈はなけれども。そこが数年の御馴染甲斐
どこまても〳〵。アヽおもしろひをかしいと
御評ばん奉　希ます

拙著堂の迂叟しるす

（上・ロ2ウ・絵）
仲の町
しほかま／楼／うつし／うゑ／て／なかを／とほる／の／大尽／も／あり
長者が甥／重三郎

（上・ロ3オ・絵）
蜀山人
帯大尽／実は／佐々木源太左エ門

（上・ロ3ウ・絵）

（上・ロ4オ・絵）
蛇／喰と／聞けは／おそろ／し／雉子／の声／はせを

（上・ロ4ウ・絵）

（上・1オ）
鶯　塚千代迺初声第二編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

駿馬痴漢を乗て走ると。夫婦の縁の奇しき中に
長柄長者の女児と生れ。綾や錦を身に纏ひ。不足
なき身にありながら。菰一枚で明暮す。乞食非人に
惚るとは。いかなることぞ其意を解さず。若も前世の

＊駿馬痴漢を乗て走る…すばらしい馬がくだらない男を乗せて走る。つりあった、ふさわしい相手にめぐりあえないこと。特に美人がつまらない男と結婚すること。また世の中はうまくいかないものであるというたとえ。＊五雑俎－事部・四「近時唐伯虎亦有詩云、駿馬毎駄痴漢走、巧妻常伴拙夫眠、世間多少不平事、不会作天莫作天。雖譴詞、亦有激之言也」（『故事俗信ことわざ大辞典』）

宿 執とせば。何様いふことのあるかは知らねど。若また神の

（上・1ウ）
所為とせば。月下氷人の滑稽なるべし。こゝに長柄の老生管。忠太夫はこの二三日。彼方へゆきて其辺の。水茶坊なンどに腰をかけ。餘所ながらかの容を。聞んとすれど十人が。話はおよそ十種にて。なか〳〵に定ならず。空しく日間を費さんより。まづ直に逢てその詞つき。且執まはしの容子も見ん。夫に就ても往来に。立て噺しも出来ぬものと。沈按なして小袖二ツと。羽織を包みて僕に持せ。さて彼所に至りて見れば。乞食は小屋に

（上・2オ）
在て。何やらん読てをり。忠太夫は其処へより添ひ。耳ひき立てよく聞ば。法華経の寿量品。さてこの巻を読ものは。素人にして。たゞ偈のみ。宗体■の人は自我偈と唱へて。女も猶よむことあるに。是は寿量品の本文なるを。斯安らかに読立るは。元来学力もある人なるべし。思へばたゞの乞食にあらずと。此時大に信を起して小屋の口に跪いながら「チトお頼み申ます」トいへば乞食は経を閣て。下たる菰を引まくり。見るに旅人めきたる

（上・2ウ）
老人。その身容さへ陋しからねば。忽地其処に身を平め。諸手を着て「ヘヱこれは何の御用にござります」ト敷たる菰に額をすりつけ。敬ふを見て【忠】「ア、これ〳〵。そのやうにされては迷惑。サテ吾儕は異なことで。態々こゝへ尋ねて来たもの。それに就いては種々に。籠入た話説もあれど。さて爰は往来中。人に聞れてとつともせず。成うなら天満まで。一所に往て下さらぬか。勿論彼処には不断から。心易い茶坊もあり。離れ舎に奥舎。目

（上・3オ）
だゝぬ所は幾干もあるから。其処へ往て噺しませう。夫に就て不躾ながら。この衣類ではといふことも。有うと察して善はないが。小袖羽織も持して来た。サア是を爰で着替て一所に往て下され」ト袱包をさし出せば。源之助は何の事やら。大方の察しもつかず。たゞ不測さに忠太夫が顔を見つめて【源】「ヘイ〳〵〳〵。お供たりと被仰ますなら。そりや何処までも参りませうが。まアその御用の條と申スは」【忠】「イヤ何にも気遣いないこと。一言いへば直に分るが」ト言ツ、後へ

（上・3ウ）
指をさし「僕などに聞えても。チト中位のことだによつて。夫で滅多にこゝでは言れぬ」【源】「ハ、ア夫なら新身の試に命

＊自我偈…『法華経』「寿量品」にある「自我得仏来所経諸劫数無量百千万億載阿僧祇」以下五言百二句の偈文の、最初の二字を取っていう。（『例文仏教語大辞典』）

でも呉と被仰ことか」【忠】「ハ、、、、、、大違ひ。夫はむかしの劇場の條ヨ。其様な白痴た事であらうか」【源】「サテ有難うはござります が。此衣類は頂きますまい。何故と申スに所謂なく。人様より受るも不義。またいはれなく物を人に。遣るも不義とか申ます。シテ見ればこの衣類を。頂くも不義下さるも不義。むかし孫晨と申ス人が。餘り見苦しい形を致して。居たのを気の毒

（上・4オ）

がり。或人衣服を整へて。孫晨に送りましたら。孫晨が申スには。お志は嬉しけれど。彼方よりして衣服なンとを。受べきの道理なし。尤道理なきものを。人に呉れるも義にあたらず。されば泥の中へ抛るにおなし。我斯のごとく陋しけれど。泥土にはあらずと言て。これを返したりといふことあり。今の所その趣に。大かた似より候へば。受がたし」とまうしけるを。忠太夫篤と聞。年は十七八なるべけれど。まだ前髪さへとらざる少年。斯のごときの故事来歴。チト高慢にはあり

（上・4ウ）

ながら。知らでは口へ出べきならず。何様智量の人なりと心に十分感じつゝ【忠】「ハ、、、、、何の事やらこの年になつても商人同様。それ等の義理も存ませぬが。今にお噺しが付たうへでは。衣類はおろか千万両の。金をあげても貰つても些も構ひないほどの事。その小口のお噺しに。仮令着類の五枚や三枚。何の子細はござりませぬマア〳〵左右のことなしにこれを召れて天満まで。一所に往て下さりまし。若其上で私の申スことがお気に入ずは。脱でお返しなさるまで。何にも

（上・5オ）

蹺蹊ことはない」ト強つけられて源之助。奈何はせんと先の程より。沈吟なせしがこの人物。人を騙して囮にでも。仕やうといふ風には見へず。万一左様した事ありとても。素性を明せば宿なし乞食。たゞ不相応の状をして。茶坊へあがつて飲食を。人並にしたといふ。咎めがあらば先それまで。先右も左も諸共に。往て見んと胸を究め【源】「何様も右に左心済はいたしませんが。夫ほどに被仰て下さること。御辞退ばかり申スもいかゞ。然らばお供いたしませう」

（上・5ウ・絵）

忠太夫人を／遠ざけて
源之助

（上・6オ・絵）

お梅が病根を／かたる
忠太夫

（上・6ウ）

【忠】「ヤレ〳〵承知して下されたか。夫ならば其衣類を」【源】「垢れた体へ不遠慮ながら。拝借をいたしませうか」【忠】「ナニ〳〵些とも

構ひのないこと。履物も雪踏を一足。准備して来ました。
コレ〳〵雪踏を爰へ出してあげやれ」ト手間はかゝらぬ支度の
捷さ。「サア夫ならば」と連立て。程遠からぬ天満の町。源之助は
この日来袖乞はしながらも。町などへは来しことなく。たゞ往
来にあるのみなれば。誰とて認れる者もなく。例忠太夫が
往つけの湊屋とかいふ料理茶坊。僥倖奥の離れ舎も。

（上・7オ）

明て居るといふことゆゑ。其所へ往て供の僕をば。表廓で
酒でも飲み。支度をせよと分付て。さて密やかにさし
対ふ。両個が間へ持はこぶ。吸物刺身とり殽。その他にまた
三種四種。忠太夫は女にむかひ【忠】「お酌をするにやア及ば
ねへ。用があれば手を敲くから。左様おもつて居て呉な」
【女】「左様ならば」ト廓へゆく。さて忠太夫は源之助に盞を
酌てさていふやう「何だか異な容子だと。さぞ御不安心に
思し召たでもござりませうが。私は長柄に居る。浜。左衛門

（上・7ウ）

と申すものゝ生管。忠太夫と申すもの。チト折入て願ひたい
一條がござりますが。お聞届け下さりませうか」トいと慇懃に
演られて源之助は猶不審し。持たる残口を其処へ置。坐を
避て【源】「これは〳〵。兼てお名をば聞およぶ。長柄長者のお
生管とな。何事にてこの非人を。御丁寧のお取扱ひ。一向と
解せません。折入てのお頼みとは。何のことでござりますか

勿論箇様な人外でも。また夫々の御用があらば。何なりとも
と申たいが。私も腹からの非人でもござりませず。容子あつて

（上・8オ）

暴に零落。宿無とまでなりましたれど。心に深い願ひも
あり。何事なりともお頼みに。任せませうと立派には。ちと
お請が出来かねます」トいふ詞つき万事の作法。実に
よき人の不運にて。零落したに相違なし。心に深い願ひ
といふは。その家を再興せんと。思ふなどにてありぬべし
若夫ならば長者が息で。いかやうにもなる次第。先此方
よりいふべきことを。言はねば綽もわからずと。思へば手を
揚「まづ〳〵是へ。お燗が冷る寛りツと。一杯あがつて

（上・8ウ）

お聞なされ」トいはれて元の坐に直れば。忠太夫は莞爾
して【忠】「サテ申すも異なものなれど。主人の娘お梅と申
すは。今年十六になりますが。先頃神明へ参詣のをり
手飼の鶯鷹の為に。危い所を丁度折よく。助けて
下されといふ事は。定めて覚えがござりませう」【源】「アヽ
いかさま当下は。大造なお礼に預り。既にお返し申さう
かと。存たれど御大家へ。対して却ツて失礼と夫なりに
頂きました」【忠】「イヤハヤそれ等は些細のこと。さてそのとき

（上・9オ）

娘御が。お前を不意と見初てから。たゞ旦暮その事ばかり忘れる隙もあらばこそ。終に段〳〵病気は重り。最早この世の人ではないと。成た所を吾儕が女児。お幾といふは幼稚ときから。主従なれど同胞にも。倍て善好ことなれば傍を離れず容子を見て。何様やら釈のありさうなと詞を尽し理を責て。聞た所が其訳分り左様いふことも因縁で。むかしよりある例。何卒思ひを達かしてあげ度ものと女児が嘆き。併しこれはチト難渋に。思つたけれど仮初

（上・9ウ）

にも。人の命に抱はる時宜。主人夫婦にも得心さして。さてこの上はお前の胸。只一ツでまだ咲ぬ莟の枝を夫なりに。塵にするとも春の日の。恵によつて花咲すとも。二ツ一ツの大事の場合。若仁心があるならば。今から長柄の婿となり。娘お梅が命を助けて。下さらば親族一同。これに超たる歓びなし。この儀を内々申さんために。これまで招請いたしました」トいと慇懃にいひければ。源之助はたゞあきれに呆れて。霎時詞もあらざりけり

（上・10オ）

第二回

再説当下源之助。暫くあつて顔をあげ【源】「さても〳〵承はれば。何か赤面至極のお噺し。餘りの事に今爰でお返辞さへも出来かねるほど。ハテ誠に困ツたもの。勿論元は何にもいたせ今は住所も定めなき。無宿の身のうへなら。聟にならうが僕にならうが。構ひはないやうなもの。殊に長柄で名も高き。浜氏の聟などゝは。誠らしくも思はぬまで。果報に過た身の出世。何がさて少しでも。否を申さう條もなし。たゞ

（上・10ウ）

身を程をかへりみて。御辞退申すは当然。併しながら今の仰に。偽りのないならば。不束なる私ゆへ大切の娘御が。命の際と是もまた。世に珍らしきことながら。若左様なら前生の。因縁でもござらうが。致して見れば其ことを。固く御辞退申スのもサテ心済がせず。さればとて昨日まで。菰を敷寐の乞食が。長柄の婿とは餘りの違ひ。夫のみならず先刻も。申す通り心に深い願ひがあつて。近々に中国四国殊により。北国迄も参らうかと申す一儀は止に止れず。また延すにも延されず

（上・11オ）

されば僉さまの御心配で折かく御縁を組だ所が。半年共落着れず。他国いたせば其上には。一年で帰らうか。任意二年も三年も。掛りませうか夫も知れず。左様して見ると中々に。縁を結んで物思ひ。夫よりか其娘御に。よく御異見を被仰て。是から私他国いたし。心願を果し次第。直に帰ツてその節は。御約束通り婿になり。友白髪まで配遂ませう。こゝを克々合点して。若も日数が長くなり。二年三年掛ツても。待て下さる信切なら。此方に於て聊も。相違の

（上・11ウ）

事はござりませぬ。此よしを以て宜しいやうに。お取はからひ下さらば私に於も大に安堵。御推量下さりまし」トいふを逸々聞終り。忠太夫は点頭ながら。膝を進めて【忠】「被仰処一応は。御尤にも聞えますが。其処が偖年の往ぬ。女児の了簡はまた格別。程よくこれを騙すのか。若また虚言でない所が。往方も知らぬ旅の空。二年三年の月日には。何が何様なる者やらしれず。夫も一旦縁を結んだ。うへの事なら詮方もないが。世にも果敢ない口約束。大かたそれは私が。宜いやうに

（上・12オ）

言のであらうと。疑がはれてはモウ夫限り。迚も命を助ると申すことにはなりません申すも。甚不躾ながら。不慮の事でお家が潰れ。今零落のお身となる。心に深いお願とは。定めてその家の再興を。なさり度おぼし召。夫に就て中国四国。北国までもと被仰るのは。定めて種々なお手続きが。あつての事でござりませうが。私の主人浜。左衛門も。世間は随分広いもの。お縉紳にも淀の御城主。与惣左衛門さまとは親類も。同様にいたすこと。夫

（上・12ウ）

に続いて中国方にも。多分懇意のお方もあらば。殊に因たらそれまでの。御足労をなさらずとも。行届くまい者でもなし。また斯申すも如何でござれど。仮令何やうの手続きが。有た処が金銀が。不足をしては埒あかず。都て御縁を組ますれば。其処等に少しも障りなし。今御身分にとり八九分の。利方はあらうかと存ます。サテこの通り種々と。思し召も顧ず。贅言まうすも主人の娘が。命を助けたいばつかり。何とお聞入れは出来ませぬか」【源】「偖々万

（上・13オ）

事信切に。言て下さるお前の詞。否とも応とも返辞に当惑。その四国中国も手続といふ訳でなし自身に往ねばならぬこと。夫ぢやに因て譬ていはゞ。彼楠正行が。芳野の宮の官女を以て。妻に下されんとありしとき。迚も世にながらふべくもあらぬ身の。仮の契りを何結ぶらんと。固く御辞退したりといふ。昔嘶しも今こゝに。思ひぞ出る果敢ない身のうへ。夫故にこそ彼是と。申すのでござります」ト詞の端に忠太夫。さてはこの人潰れたる。家を再興ばかりでなく。親の

（上・13ウ）

敵をもつ身と見える。夫なれば猶の事。今約束をしたりとて。行末のこと憑まれず。万一不慮のことあらば。お梅どのは不往後家。一生俟て年寄まで也夫よりか今僅。仮令ば三月半年でも。思ひを遂て得心づく。別れて首尾よく本望を。達したならばそれは重畳。若また何方いかなる方にて。災難ありともその事の。通じるやうにしておかば夫は互に覚悟のうへ

右にも左にも今直に。得心させずはなるまじと。忠太夫は猶小膝を進め【忠】「何の事かは存じませぬが。自身にお出

（上・14オ）

懸なさらねば。ならぬ訳なら豫てより。左様申ても置ませうから。夫はお両個の御相談。何時なりとも御勝手に。御発足も苦しからず。長者が方にも健な。弱冠も大勢居ること次第によらば何人でも。お供にお連なされませサア箇様にまで申すからには。是非御承知下され」ト切にいはれてこの時に彼母が遺書にも認め有しことなンと。彼是おもひ合しつゝ。和漢古今に再となき。この次第の是非得失。人間所業にはしれずといへど。深き故あること

（上・14ウ）

ならん。まづその意に随はんと【源】「それほど迄に仰せのあるを。なか〳〵仇には存ませぬど。餘りのことに御挨拶。いたし兼て居たるが。何もかもみな此方の。申ス通りで夫もよしと承はるうへは何がさて。聊辞退いたしませう」ト聞て歓ぶ忠太夫「さては御承知下されたか。夫に就ては今より直に。私方へお越なされ。さて彼小屋は今宵のうち。火を懸て焼はらひ。世間の人にはそれ故に。何処へか逃てござつたと。言触さすれば夫で済む。勿論先刻も申す通り。飲湯さへも

（上・15オ）

果敢〻〻しく。通り兼る御病人。今日のことを申シたら。さぞ喜んで一日倍に。全快なさるは必定と。存ながら五日や十日で。なか〳〵並にはなられまい。早くツて三十日。その間は先私　方に御窮屈でもござりませうが。お遊びなすってござりまし」【源】「斯なるからは万端を。宜しくお任せ申スに因て都合の宜やうにお頼み申す」【忠】「委細承知いたしました」ト駒下駄履て廓に出。僕にむかひて【忠】「まだ自己は種々用があるによってナ。其方はモウ先へ帰れ。また是から餘所へ往から。

（上・15ウ）

迎ひを越すには及ばぬと。宅へもよく左様言やれ。」ト僕を帰して暫くは。猶豫するうち日は暮たり。両個は夜食など喰仕舞ひ。頓て小屋の辺へゆき。燧を出して火を懸たれば。元来菰張柱は竹。はち〳〵と燃立にぞ。両個は足早にこゝを去り。さてはや時分も宜ければと。忠太夫は源之助を。伴ひて家に帰り。女どもには然る方の。若旦那を暫時の間。家におくといひ論へ。その翌日は髪あげ沐浴。残る所なく世話すれば。実にや源之助が人品骨柄。なか〳〵

（上・16オ）

尋常の弱冠ならず。お幾は幽に此ことを。聞より家に立帰り。父忠太夫にも精しく聞て。餘所ながらこれを見るに。お梅が深く思ふも道理。源氏の君や業平は。むかし噺しに聞たるばかり。なか〳〵これには及ばじと。我しらず

また惚々と。思ふばかりに惑ひつゝ。急いでお梅が子舎に帰り【いく】「今鳥渡見て参りましたが。モウ御髪も出来お湯もめして。誠に美くしくおなり遊はした所。ホンニ何様てございませう。先頃私も見ましたとき。なる程能とは

（上・16ウ・絵）
おいく

（上・17オ・絵）
おうめ

（上・17ウ）
存ましたが。召物も悪し大なしに。垢れてお在なすつた所為か。夫ほどにも思ひませんが。今日見ましたら誠にモウ。別の方かと思ふばかり。ホンニ貴嬢はお見立が。誠にお上手で入ツしやる。夫も宜が斯なつては。唯貴嬢が御丈夫に。お成なさるのを待ばかり。サア御膳でもあがりませんか。召あがり度お肴でも。あるなら取に遣ませう」トいはれてお梅は心の裡の。嬉しさ身にも餘れども。また恥しさも先立て。顔の半を横にいれ【梅】「忠太夫が種々と。気を

（上・18オ）
揉でお呉で吾儕が願ひ。まア協ふやうに成たが。老爺さんや慈母さんは。何様思し召て入ツしやるか。斯言ては勿体ないが。知つての通り慈母さんは。何様も常々邪慳な御気象。定めて蔭では姪奔娘。なんぼ惣領なればとて。餘まりな我侭気随。それを老爺さんや忠太夫が。いふなり次第のなされ方ほんにモウ呆れるなンそと。吾儕は勿論老爺さんまで。悪く言てお在だらう。左様して見ると吾儕ゆゑ。親まで人に譏らせて。思へば不孝のこの身のうへ。

（上・18ウ）
彼時死で仕まつたなら。この苦労はありやせまい。慈母さんは大仁坊と。何様した事か和合のよさ。大仁坊は方々を。歩行まはる人だから大かた先々種々に評判されることだらうと。思へばそれも苦労になり。嬉しい中にもそのことで。誠に気が浮ない」トいふも逸々最と。返す辞もなかりけり

鶯　塚千代迺初声第二編巻之上［終］

（中・1オ）
鶯　塚千代迺初声第二編巻之中

第三回

東都　松亭金水編次

お梅は既に命まで。終らんとせし其願ひ。お幾父子が粋な捌きに。願ひかなふて嬉さは。限りもあらず昨日迄。蓋で啜りし飲湯さへ。はや白粥を椀に盛り。二三杯喰

ばかりの。気張はつきしものながら。また種々と思ひ返せば。人並ならぬ乞食を。婿にするとは餘りのこと。任意先

（中・1ウ）

方は何人の。流れにもしろ零落れて。袖乞までもして居たを。見初るといふ仇なさ。世間の人に後指。さゝれるのみか常々より。何かのことを。眼に角立て。口嘈しき継母の。いかに言らん右に左に。護身影さは限りもあらず。いつそ死だが何事も。聞で心も安からんなど。思ひまはせばいとゞ猶。嬉き中にも憂をます。その心根を見てとるお幾が傍へ寄て莞爾笑ひ【いく】「お嬢さんこの二三日は。暴にお顔つきもよし。お粥もよウく召あがられて。モウ／／是ぢやア此方の者とお心易い方の積りで。入ツしやれば直に見られます。私が親父に一言。左様申ておきませうと。内証を通して旦那さまが。お客の積りで入しつて。よく／／御覧遊ばして何様して思ツたより立派な男。なる程お梅があれまでに。恋焦れるも無理はない。彼なれば婿と言て。少しも恥かしいことはない。世間の盛衰栄枯は。人間の自由にならず。窮すとなれば賊は出来ず。袖乞位は当然。少しも恥る所はない。たゞ人は器量が肝心。アヽよい婿をとり

（中・3オ）

究た。これといふも忠太夫と。おぬしが実意から出た所。それに就ても何卒はやく。お梅を達者にしたいものと。誠にお歓びでございます。左様して見れば何もくよ／／。思し召には当りません。左様申ちやア悪いけれども。慈母さまのやうなお方が。この広い世間にも二個ともありますまいサ。どうせ彼方のお気に入るものが。大仁坊より他にはございますまい」ト言かけて口の端を。自身で爪る真似をして「ありやア何でも私はたゞぢやアあるまい

（中・3ウ）

かと存ます」【梅】「左様さノそりやア知らないが。今お前から聞て見ると。たゞ慈母さんの所ばかり。併し何だか斯直に快なるのも。人が見たら笑ふだらうかと恥かしいは【いく】「ホヽヽヽヽなんのまア。全体餘まり内端過て。お気が少さいもんだ

（中・2オ）

旦那さまの大歓び。頓から左様と知ツたなら。斯大病にならない前に。幾干も仕様はあつたもの。まア／／それも跡の祭り。何卒宜く手宛をして。些とも早く快なるやうに。世話をして遣て呉れ。ヤレ／／其方も長いこと。大きに心配してくれたが。まづ斯なれば一安堵。其処で当人は忠太夫が方に。置といふ事たが其方見たか。自己も何卒それとなしに。見度もんだと被仰ますから。何のまア造作もないこと旦那と被仰と面倒だから。親父に

から。誠に歯痒うございますは」ト了得和合主従の。
噺しに霎時気も晴て。これより日数を過す程に。お梅は
稍に快く。今は縺れし髪をさへ。梳ばかりになりにけり。
さて源之助は忠太夫が。家に舎蔵はれあるにより。今は

（中・4オ）
憚る所もなしと。彼竹杖に仕込たる。旭丸の短刀を。とり
出して渠にも見せ。「これはわが家重代に伝はる短刀。この
通り零落のとき。持出したれど。非人には似つかしから
ず。故に竹杖に隠したるが。お蔭を以て人並の。身と
なるからは帯したりとも。さのみ見咎めらるべきならず。」
と聞て「それは」と打かへし。よく〳〵見るに其焼刃。素人
には分らねど。いかにも名刀と見ゆるにぞ。「身を離さず
帯し給へ」と。且そのことを内々は。長者にも語りけり。欺て

（中・4ウ）
お梅は日数経て。常のごとくになりければ。その歓び大かた
ならず。別て長者は冥土の人の。蘇生たる心地して。
則　渾家にもいひ聞せ。吉日を択み内祝言を。とり
結ばんと構へつゝ。万端に心を配り。およそ准備の出来
けるゆゑ。既に日を定めて源之助にも。熨斗目上下
花やかに。仕立てこれを贈りつゝ。さてその夜に成ければ。
家内の上下さゞめきわたりて。いと賑はしき坐敷の体
想。かねて頼みし待女郎。形のごとくに相生の。盞を

（中・5オ）
さへ済しければ。古例のごとく新婦君は。色直しとて子舎へ
ゆき。聟は坐敷へ出来り。舅姑を始めとし。居並ぶ人に
挨拶も。行儀作法は元よりにて。詞つきさへ陋しからね
ば。誰驚かぬ人もなし。長者はます〳〵笑片向て。さて
定りの冷酒を以て。源之助と盞なし。その次は母のお牧。
土器とつて一杯飲み乾し【まき】「サア婿どのお近づきに。盞を
進ぜませう。見られる通り老年で。種々世話にもなり
ませう。以来お頼み申ます。アヽ併し婿どのは。此頃迄アヽ何とか

（中・5ウ・絵）
源之助

（中・6オ・絵）
おまき

お牧／源之助／を／恥しめん／と／し／て／赤／面／す

（中・6ウ）
所も聞たが。直に忘れる。菰張の主人といふこと。定めて
陝いことであらうが。斯暴に広い宅へ出でござつたら。

＊菰張→こもばり【薦張】…小屋などの周囲にこもを張りめぐらしておおうこと。
また、その小屋。（『日国』）

ホンニ師直の言種ぢやアないが。井戸の鮒が井戸がへの釣瓶にかゝり。夫から広い泉水へ放されて。却ツてまご〳〵。彼方の杭へ鼻を打つけて。ピリヽ〳〵と死ぬと言たが。まア其様なものであらう。嗟併しながら婿どのや。必気にかけて下さるな。吾儕は全体御酒が大好き。今日はお愛たいといふにつけ。昼ツから引きりなしに。

（中・7オ）

給て居たもんだから。後も前も知れなくなつた。たゞ思ふことを胸の内に。仕舞ておくことが出来ない性で。ツイ浮々と物をいひ後では後悔するけれど。サテこれが吾儕の僻サ。しかし言て仕舞ば後はない。アヽ〳〵大きに酔ました。ヲヤ〳〵何時の間にかお梅さん。モウお召替が出来たのかへ美しい。今婿どのゝ事を些ばかり。悪く言たが聞へたかヱ。モシ聞えたなら堪忍しな。夫だが吾儕は嘘はいはねへ。ノウお梅左様ぢやアないか。コレ〳〵お幾婿

（中・7ウ）

さまへ早くお酌をしてあげろ。ソレお吸物を運んで来た。冷酒はモウこれ限りさ」ト唇るを長者は聞敢ず。苦々しき顔をして。誡めんと思ひしが。然すれば猶も言募り。捨置がたきことにもならんと。胸を定めて堪へて居り。お梅は常々箇様なる。気象の人とは豫ても知れど。今宵は別て改まる。此席にては遠慮さへ。あるべきものを情なし。とは言ものゝ其元は。僉この身の悪いゆゑ。竟口の端にもかけらるゝと。これも堪へて。物いはず。程なく種々の殽も出て。いと

（中・8オ）

賑しき座敷の体想。右左して膳も出。それも済ておひ〳〵に。杯盤をとり収め。頓て茶を出さんとする時に至り。お牧は源之助にうち対ひ【まき】「まづ〳〵万事滞りなく相済でおめでたい。其処でこれから僉さまへ。お茶をあげる積りで先刻から。湯も沸騰しておいたけれど。御酒の跡では薄茶が能もの。旦那も吾儕も大好サ。其処で女どもに分付て。炉へ炭を次して置た。今見たらよく沸て居るのサ。何と婿どのお近づきに。僉さんに一服づゝ。立て

（中・8ウ）

あげて下さらぬか」ト。いふをお梅が聞あへず【梅】「夫よりか慈母さん。矢張煎茶が宜ではございませんか」トいふは元来意地悪に。斯いひ出して困らして。笑ツて恥を欠せんト。母が巧みをよく知れば。止させんとすれども可ず【まき】「何のお梅大きにお世話サ。アヽ〳〵併し左様でない。折角座敷の済だ所また何のかのと手間どらしては。餘まり心のないやうだが。たツ

＊師直の言種…高師直が塩冶判官に対し、狭い井戸で飼われていた鮒が広い川に放されると、取り乱して死んでしまうことに譬えて見識の狭さをののしったとされることに基づく。「惣体きさまのやうな、内にばかりゐる者を、井戸の鮒ぢやと言ふたとへがある。」（浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』）

た薄茶五六服。半時もかゝりはしない。お前はまア先へ往て。横でも温めて置たが宜」【梅】「ホヽヽヽヽヽ慈母さん。辞なことを被仰

（中・9オ）

ますヨ」【まき】「ヘン餘まり辞でもありやすめエ。サア／＼婿どのお嫁御さんがお急ぎだ。此方へ来て立ておくれ。サア食さまも入らツしやい。コウ／＼忠太夫お前も来な。婿さんのお手前を。よく拝見するが宜」ト手燭を点し先にたち。人々を促がせば。源之助はこの時に。姑が心篤くと暁り。元来お梅と善らぬよしは。薄々聞たる事もあり。夫故此身を辱かしめて。彼にも恥を与へんとす。よくは知らねど茶の道も。少しは習ひしことのあり。薄茶くらゐは仔細もあらじと。更に

（中・9ウ）

臆する気色もなく。頓て炉の前に坐を卜て。形のごとく手続なし。居並ぶ人に進むれば。お牧は心の質違ひ。何といふべき詞もなく。手を拱きて見て居るのみ。長者はこれを見るからに。いよ／＼心に歓びて。さて其席も果ければ。思ひの外に夜は更たりと。僉それ／＼に暇乞。おの／＼臥房へ入りにけり

第四回

翠帳紅閨に枕を並ぶと。唐土の人も言おきて。綾錦に

（中・10オ）

身を纏ひ。蘭麝の薫り馥郁とし。想ふ情郎と初寝の夕。お梅が心は魂さへ。たゞ天外に飛去りて。嬉しなどゝは前のこと。たゞ身も竦むばかりなるに。源之助も其始め。鳴野の郡司の子にありながら。かゝる富貴の閨に入る。身にまた覚へなき故に。不覚に四辺の見らるゝ心地。伝へきく浦島が蓬莱宮に行し時。人間界に見しことの。なき者ばかりに駭きて。恍惚としたりといふ。夫にも劣らぬ粧ひかなと。心裡に世間の。盛衰を感じ

（中・10ウ）

つゝ。暫してお梅にむかひ【源】「サテ誠に不測な縁で。見る蔭もない吾儕風情が。お前の婿になるといふは。まア何様した因縁かと。幾干考へても分らない。併しそれは夫にして。縦令何であらうとも。一旦斯して縁を組ば。生涯配遂るが人の道。お前もまづそ■

気だらうが。長いうちには種々な。妨も出て来るもの。さて何様なことがあらうとも。心を易ぬが人の操。まだ昨今のことだけれど。老爺さまは何方までも。誠に邪

（中・11オ）

気のないお方。その上物事勘弁づよく。実に結構なお方と見えるが。慈母さんは左様は往ぬネ。彼容子では

＊翠帳紅閨…翠帳を垂れ、紅色に飾った寝室。貴婦人の寝室。（『日国』）

不断でも。餘まり優しいことはあるまい。尤継母の子を憎むは。世間一統千人が。千人ながら左様だけれど。御自分に子はなしサ。年が老ばお前方。両個の他に便りはないもの。随分艶しく実子同様。したらば何様か宜さうなのを。然もないは実に不測。これにやア何か心の底に。深い巧みがあると見える。夫ならばいよ〳〵以て。よく気を

（中・11ウ）

着にやアなるまいヨ。今まで独の時と違ひ夫に吾儕が斯して来たのは殊の外の御不承知だ。シテ見ると何かの端にやア。飛だ泣を見るかも知れない。勿論吾儕は忠太夫とも。約束をした通り。なか〳〵長くはこゝに居ない。まづ右も左も旅へ出て。その用が片付ば。夫から一生動きはしないが。サテその用が何時片付か。暗を礫のやうなこと。夫だからこの縁は。組まいと言たけれと。斯なるもみな神ごと。お前もかねてそのことは。左様思ツて

（中・12オ）

居ておくれ」【梅】「ハイそのことも忠太夫から。よく聞てはをりますが。成うことなら何所へも。往ずにお在なさいまし な。飛脚で済なら幾干でも。また夫々のお使ひに お遣ひなさる人もありますから」【源】「イヤ飛脚や使ひで済ことなら。格別の苦にもならねへが。なか〳〵左様いふ訳にやア往ねへ」【梅】「夫なら何卒私も。一所に連て往て下さいましナ」【源】「ハヽヽヽ大和巡りか金毘羅参りの。遊山半分ぢやアあるまいし。一人でせい覚束ないのに。若い女なぞを

（中・12ウ）

連て往て見ねへ。何様な目に逢かも知れねえ」【梅】「夫ならお前様強い人を。五人でも七人でも供をさして参りませう。ヲヤここにお硯蓋が少しありました。貴郎何ぞあかりませんか。先刻御膳も給ましたが。何だか少しお腹が空て来た。夫に鉄瓶のお湯もチン〳〵と。音がして居ますからドレ汲であげませう」ト寐間着のまゝのしどけなさ。立出て湯を汲来り。床盞の口取を。そのまゝ其処へおきたりしを。倖ひと引よせて。枕元におけば源之助も。二ツ三ツ

（中・13オ）

撮んで食ひ【源】「斯いふことが此方の持だから。若慈母さんに目つかると。そりやこそお菰の性を見はしたと。何様に笑はるか知れやアしない」【梅】「アレモウ否な其様なことを被仰ますなヨ。お湯はモウ宜うございますか」【源】「アヽモウ沢山だ願はくは烟草を一ぷく呑度ネ」【梅】「ハイつけて上ませう」ト了得和合若夫婦。程なく眠りに着しなるべし。爰に万福寺の大仁房とて。四十ばかりの出家ありしが。先頃長者は大病を煩ひ。医療さま〴〵尽せども。更にその

＊世間一統…世間中。世間いたるところ。満天下。『日国』

（中・13ウ）

験あらず。はや此うへは神仏のお力を仮ばかりと。所々の神社仏閣へ。手の達くたけ願篭して。祈りし中に

この万福寺には霊験新の不動尊あり。これを祈らば霊応あらんと。さて住持なる大仁房に。数多の祈祷料を送りて。頼みにければ大仁も。長者が頼みと大に歓びさて遠方にて祈らんより。病人の次の間にて祈らば自然利益も捷しと。こゝへ来て祈祷したるが。長者がさしもの大病も次第に快くなりて。日ならず平復に

（中・14オ）

及びしより。長者は猶さら家内一族。大に喜びて大仁を生菩薩と敬ふ中にも。お牧はいよ〳〵尊敬して。夫より後は甲乙が鼻感冒をひきたりとて。この法師をうち招ぎ。加持祈祷を常となし。時に取つては寐泊りをすることも数回なり。殊に大仁は出家に似ず殊さらの大酒ゆゑ。夜に入れば殺を調理し。酒を飲するが例となる。他に対身をするものなければ。お牧は得たりと其処へ出て。酒嚥をするほどに。稍に従容て。今ははやる者さへ多かりける。一夜大仁は例のごとく。お牧と両個さしむかひ。互に八九分の酔心に。膝と膝とを衝合して【大】「それでもこの頃婿が来て宜なア。しかしありやア無宿の。乞食だといふが正真か。以前は何様な奴にもしろ。乞食にまで成たものを。長柄の婿とは些可咲なア」【牧】「ほんにサ世間で聞たらば。嘸悪くいふだらうねヱ。彼もお梅が我侭から。起ツ

（中・14ウ）

人の見る目も。厭ふばかりのことあれど。お牧が威光を恐るゝから。口外をする者こそなけれ。時によりては密々と譏

（中・15オ）

た事とは言ながら。長者もきつい物数寄サ。併しそれゆゑにお梅の病気が。癒ツたから些中だが始め。吾儕の了張ぢやア。縦令お梅は病で死なうが。無宿なンぞを婿にしちやア。第一名が汚れやうと。言張れば長者でも忠太夫でも詮方はないはサ。併し左様するとお梅は死ぬ死んで見りやア吾儕が邪慳で殺したとほきやアいはれねへ。夫よりか倶〻に。承知して婿にとり。どうせお菰の事だから。何も出来ねへはしれた事。其処で何様も彼次第ちやア

（中・15ウ）

世間へ婿の披露は出来ねへ。然けれど一旦婿にしてお梅を呉た者だから。今さらに止れもせず。其所で百両か二百両の。本銭を遣ツて両個の縁切り。左様すりやア又訳なしだ。お梅も焦れて死ぬ所を。婿にして蘇生。その

＊中…ぐあいの悪いこと。そぐわないこと。また、そのさま。（『日国』）

うへ多分の本銭を貰ツて。その情郎と一ツに暮しやア
実に福徳の三年めだ。辞も応も言れはしねへ。左様
して後にお花めは。お梅と違ツて蓮葉な生れ。些また
趣向ありサ。其処でこゝを種なしにすりやア。豫てお前と

（中・16オ）
言交した。通りにするなア手も濡さずヨ。その積りだから
彼晩にも。茶を立させて見た処が。何か千家の服紗捌き。
甘く遣たから詮方はないが。何でも長ヱうちにやアその
注文に。はめやうと思ふのサ」【大】「左様かさう心遣りやア。何か
見出さねへことはあるめヱ。併し坐敷の執廻しも宜かったさう
なり。その上薄茶でも立ると言ちやア。なか〳〵の奴だノウ。
まア〳〵。気を寛たりして。縁と時節の末を待サ。アヽ大に
酔たと思つたら。モウ時計の子刻だヨ」【牧】「夫ならこゝを片

（中・16ウ・絵）
〈画中〉孟斎筆
おまき

（中・17オ・絵）
大仁坊
奸婦売僧に通／じてお梅夫婦を／害せんと計る

付ませう」ト手を敲いて侍女を呼び【牧】「片付て仕舞たら。
例の通り大仁さんの。お床を敷て上るのだヨ。其方此間の
晩大仁さんが。腰を捻ツて呉とお言なすツたら。否だと
言て逃たさうだが。今回から被仰通り。よくお摩をして
あげな」【こし元】「ハイ〳〵左様いたしませう」トいひつゝ先へ行傍輩
を追かけて耳に口「異う言ぢやアないかねへ。此間も
お前吾儕が寐た跡で。徐々と来てお泊りサ。夫を知ら
ないと思つて居るうちが宜」ト密々譏て厨へゆく。其はさて

（中・18オ）
措嶋原の。歌妓お哥は見ずしらぬ。人といへども何処やらが。
好だらしいと思ふにぞ。種々〳〵世話して一晩泊め。帰すも遺憾
けれど。強て駐めんよしなさに。帰しては遣たれど。いかで此侭
になるべきぞ。近きうちに来るは必定。殊に廓に索る
人の。ありとまで言たるをと。僅のことを憑みにて。待ども〳〵
日数経て。さらに音信あらざれば。餘りのことに呆れかへ
りて。噂は日毎止ときなく。それに就ても索ぬる人を。よく
見究ておくが肝心。帯大尽の面憎さに。今まで成たけ

（中・18ウ）
その坐敷を。外しにけれど今よりは。勉めて容子を看る
に若じと。幇閑などにも夫となく。頼めば彼等も意得て。
旦那に勧めこの頃は。三日にあげず呼るゝにぞ。お哥は猶も
心を用ひて。勉むるほどに九重とも。いと〳〵親しき中と

なり。内証ごとさへうち明て。語るやうにぞなりにける

鶯　塚千代廼初声第二編中之巻［終］

（下・1オ）

鶯　塚千代廼初声第二編巻之下

東都　松亭金水編次

第五回

「サア／＼鮒公急ぎだ／＼。寐て居ちやア往ねへぜ。瓢箪や東楽は何処へ往たヱ。今大鶴やの院へ往たら。旦那が大きに噴恚て居て。「コウ／＼僉は何処へ往た。早く不残連て来い。」と例の疳積だから頭を抱へて。早々に駆出した。夫でも女歌妓のお哥とお春。おきのなんぞはモウ来て

（下・1ウ）

居たツけ」「夫ならそれにちよつぴら預けて。湯を一ぱい浴て往ても宜らう」「左様すると又帯大尽が。今日一日憤発て居て。例の通り困らアな。ヤア瓢箪も何処からか出て来た。サア／＼何にしろ早く往う」ト幇閑夥斗の袖引ぱつて大鶴屋の二階へゆくと案のごとく帯大尽「ヤイ■其方達は何処へ往たヱ。例でも／＼よく油を売たがるなア。辞ならモウ来ずと宜。其方達ばかり幇閑ぢやアあるめへし」「ハヽヽヽヽイヤ旦那。左様被仰と面目ないが。実は

（下・2オ）

この瓢箪といふ男。斯見えても只一人。堕落がございます。天窓と口が大きいから。鯰と諢名を仕ます女。夫で容貌御賢察。所が少々義理の悪い。事がありとか何とか申すで。今日途中で捕まつて。世間も恥ず口舌最中。所へ不侵出ツくはして。偖聞捨にもなりませず。種々と割をつけ。漸々済して二人ながら。直に駆付ると旦那の逆鱗。全く油を売たでなし。我慢のならぬ色情一件。何卒御勘弁こと」ト聞て大尽莞爾笑ひ

（下・2ウ）

「ハ、ア瓢箪にも情合があるが」【へうたん】「ヱお情ねへ御託宣。モシ旦那左様被仰るが。是でも女が惚ますぜ。既にこゝに居るお哥にお春。何卒情合になつて呉ねへかと。口説ことは数回だが。其様に幾干もあつて見ると。面倒だから逸々厳しく断ります」【うた】「ホンニ左様でございますヨ。背が高いから。棚の物を卸すに踏台いらず。足が長いから使は早し。押が強いから物を借に遣るによし。夫だから其様な時にやア。瓢箪さん／＼と。僉情合になりたがりますのサ」

（下・3オ）

【へうたん】「ヘヽヘンおきやアがれ。時にお残口は何処に居るノ。お春さん些流行せねへナ」ト寄てかゝつてむだ口に。帯大尽も

機嫌を直し【おび】「サア〳〵是から昨夜の通り。惣踊とやらかさう。娼妓も詮方なく。一所に踊ツたうちが妙サ。先刻口を掛たツけがお時にお政は何様したんだ埒が明ざア豆でも宜モウ二三人呼だり〳〵」【九重】「はやく左様言て来なましョ」ト雛妓を急たて遣り夜へかけての大酒宴折を見合せ九重は歌妓お哥に目加して次の間へ密と

（下・3ウ）

外し【九】「此間頼んだことを左様言て呉なましたか」【うた】「ア丁度アノ晩にお見かけ申たから宅へお連まうしてだん〳〵と噺しましたら重さんのお言なはるにやア先頃もその典身のことを言と聞たから夫なら斯と大抵腹は極て置たがまた其様なことをいふかノ。勿論彼して居て見りやア気の揉るなア無理はねへが。ノウお哥さん何を言にも。僉金づくの事たから。文なしぢやア詮方がねへはサ。其帯とかいふ奴が。在所へ金を取に遣ると。聞たのも余程跡だが。

（下・4オ）

モウその金も来て近々にいよ〳〵典身をするといふのかとお言なさるからお金の事は知りませんが何ぞといふと典身々々と口僻にお言なはるからよもや串戯ちやア有ますまいと申たら重さんがいよ〳〵典請と極たら些とも早く知らして呉ねへどうせ詮方はねへけれど又其処に理屈もあるからとお言なはるから其事が佶度極りやア私どもにも知れないことはありませんから直に知らしてあげますが夫に就てもお前様の居所が確かりしませんと竟

（下・4ウ）

一日や二日かけ違ツて遅くなることも有ませうと申たら重さんがそりやア至極尤だ夫なら是から朝と晩と再度づゝお前の宅へ往うと夫から此方へ毎朝毎晩佶度お出なさいます今夜もモウ今頃は。来てお在なさいませう」【九】「ヲヤ左様ざますか憑もしいねエ。何だか口で斗り言て居てまだ正実に掛合は。しなませんやうだヨ夫だから遣手衆も何とも言ませんが併し彼いふ位だから。モウ〳〵近々かと思ひますのサ」【うた】「重さんの方はその訳だから間違ひは有

（下・5オ）

ません」ト大方咄しの片付時分。お哥は「何処へ往た娼妓は」と。探す声の聞うれば。両個はそれと目加して。お哥は直に院へゆき。九重は裏階子より。厠へゆきて徐々と。来れば誰も気は着ず。例の騒ぎに時移り。漸〳〵引過に収まりて。みな夫々に帰りゆく。斯て一日二日過。まだ朝まだきの事なるが。源之助は袴羽織。大小さへも立派な打扮で。お哥が門の辺に徨み。首をかたげて一人言「ハテな何だか男と両個。真の話説をする容子。邪魔を入

（下・5ウ・絵）

九重

（下・6オ・絵）

なるは否なり／おもふはならず／とかくうき世は／まゝならぬ／参曲山人

おうた

（下・6ウ）

るも気は利ねへが左様なればと言て直翌日。来るといふ訳にもいかず。まア右も左も容子を見やう」と。開る障子の音につれ。一眼見るよりかけ出す【おうた】「ヲヤマアお前様どうなさいました。何は右もあれ此様に久しく。御沙汰のない筈はないがと。旦ても暮ても母と両個で。お前様のお噂ばかり。夫でもマア御機嫌よくツて。誠に嬉しうございましたヨ。サア此方へおあがり遊ばせ。種々〳〵お噺しもありますから」【源】「実に彼時は二三日にも来る積りだツたが。思ひ

（下・7オ）

寄ねへことが出来て。今日で丁度五六十日。一足も出ねへといふものだから。気に掛ることもあるし。都合の悪い理屈もあるが。何様も詮方なしの居竦まり。まア夫はそれとして。何か此お方と折入た。商議がある容子。今這入ちやア気が利ねへなと。門口で考へたが。まさか外に立ても居られず。大きにお邪魔をいたしました」ト挨拶すれば来てゐる男も。よき節に挨拶し。何か塞で居る容子【源】「お哥さん自己は何なら。二階へでも往て居るから。何様いふ噺しか

（下・7ウ）

知らねへが。寛りツとおしなせへヨ」【うた】「ハイ有がたう。実は大変な内証噺しサ。ホンニ左様申せば先頃は。この方とお前さんの人違ひで馬鹿なこと。彼お方でございます」ト聞て男は膝を直し「跡で承はつたら私と。貴郎と間違へて幇閑どもが。騒いだと申すこと。何か召物なンどを引裂たさうで。誠にお気の毒でございました」【源】「ヘヽヽヘン銀と鉛をとり違へたうちが可笑のサ。吾儕は表に居ましたから。お噺しも聞へねへが。その帯大尽とかいふ人が。娼妓を典身

（下・8オ）

すると。いふのは粲然と聞ましたが。今回それぢやアいよ〳〵典身と極ツたのでゝもありますか」【うた】「昨夜その噺しが極つて。翌日かモウ明後日は。娼妓を大尽さんの在所へ連て往と言ますツサ。所がお前様お聞なさいヨ。この重さんも娼妓も。なか〳〵離れる了簡なしだが。さればと言て金づくは。智恵にも膂力にも往ず。尤かねて切羽迫れば。両個で死なうとまで言交した中。今更心変りはないが。何をいふにもその訳で。逢て噺しを

（下・8ウ）

することも。蹺蹊から詮方がない。何様かして今夜にも。引張出して身を隠さうかと。実に後へも前へも往ずサ誠にモウ私どもにやア。些も工夫が着ませんは。引ぱり出すとした処が。今まで揚詰の時でさへ。少し影が見へないと。何様した／＼と囂ましいのに。モウ自己の者となつちやア。なか／＼浄水にも浮かりと。遣る事ちやアありません。夫に彼大尽さんも。重さんといふ深い人が。あるといふことは歌妓衆や。幇閑からもよく聞糺して。知ツてゐるから

（下・9オ）

猶いけませんは」【源】「左様か何にしても差迫ツた一件そりやアほんに御苦労だらう。シテその大尽の在所といふなア。餘程遠い所かヱ」【重】「ヘイ九重が噺しぢやア。加賀だとか申ました」【源】「その人の本の名は何と言か知つてお在か」【重】「それがサ娼妓子共の事て。定かには知りませんが。先日在所から参つた状を。紙入れから落しましたを。急いで仕舞たさうでございますが。ほんの粲然と見ましたら。佐々木源なんとか書て有た。勿論小書を見る間もなし。跡は知ら

（下・9ウ）

ないと申ました」ト聞て忽地面色替り身を起せしが直さまに。驚然とうち笑ひ【源】「其様に驚くこともないが。加賀の国で佐々木源太左衛門といふのなら。吾儕が叔父に相違ない。それならば右の小鬢に少し兀た所があり。また右の手の小指が二節。瘭疽を病で落たといふこと。叔父とはいふが幼稚ときに。別れて互に顔はしらず。ハテその叔父あるまいか」ト手を拱きて居たりけり

第六回

（下・10オ）

当下お哥は進みより【うた】「ホンニ先頃お噺しに。斯いふ人を尋ねたいと。お言なはつたから大尽さんの。お座敷へ出るたんびによく気を着て見ましたがネ。小鬢に少しの兀のあるのは。隠しツこの出来ない所。そりやアよく知れてありますが。何様も小指が分りませんのサ。夫にモウ甘くかくして。一向と知れませんから。何卒して能見やう

■長い間気をつけて。漸〳〵此間見とゞけましたが。成ほど

■節ありませんで。跡がやう／＼七八分ばかり。何だか先が

（下・10ウ）

丸くなつて。可笑な状でありましたは」【源】「左様かヱ。そりやアよく見てお呉だ。夫ぢやア些も差はねへ」トいひつゝ何か考へる【うた】「差ひないと思し召なら。今日にもお逢なさいましナ。鳥渡大鶴屋へ往て斯〳〵だと。大尽さんへいひませう。先のお方も甥御のことなら。お逢なさり度ございませうから」【重】「ハテ異な事て大尽の。素性は知れたと

＊瘭疽…手足の指の末節の急性化膿性炎症。（『日国』）

いふもんだが。仮令この方の叔父さんでも。今さら何とか名をつけて典身を止させるといふにも往めへ。矢張

（下・11オ）

此方の身の上の。大難は離れねへ」ト手を拱きて考へしが。いよ〳〵これなる源之助。大尽の甥にして対面をする時は。親族に着が当然。吾々が内証の商議聞知ったからはその通り打明られてはそりや大変。先でもそれ〳〵手当もすれば。虻蜂とらずになるのみか。殊に寄たらこの身の上に。害が来るも図られず。ハテ此男［源之助の事］が何様するか。その容子を見達けずは。油断ならじと思ふにぞ。その前後に心を

（下・11ウ）

配る。源之助は霎時考へ【源】「夫なら何卒お哥さんお前鳥渡往て大尽に。モウ年久しいことだから。お覚えがあるか無かは知りませんが。お前の甥だといふ人が是非おめにかゝり度と。彼処に待て居ますが。此方へお出下さるか。またその人を呼ませうか。併し二階へあげるは異なもの。暖簾の際なり籬なりで。鳥渡逢て遣て下さい。先は斯々いふ者だと。吾儕が恰好を言たなら。ヲイといふか但しまた。其様な奴に覚えはねへと。万一いふ

（下・12オ）

かも知れねへが。若左様言たらお前様に。仮令覚がなくツても。お目にかゝれば直分る。其下名前も申ませう。是非〻〻と達ての頼み。廓まで連て来ますからと。其処はお前の弁口で。何様か逢やうにしてお呉なせいナ。併し二階へ往ことは。チト困る訳も有から。左様ねへやうに噺してお呉」［二階へゆくときは腰のものをさゝれず故にこのことをばくれ〴〵断はるなり］と頼まれて源之助が。底の意をしるべきならねば。お哥は帯を締直し【うた】「夫なら往て参りませう。何卒大尽

（下・12ウ）

さんが例のやうに。酔ずに居てお呉なら宜が」ト言ながら出てゆく重三郎はこの趣きを。聞ばきくとて胸安からず。さて何様したらと種々に心を砕けば砕くほど斯る折には忘念のみ。浮みてさらに一定せず。右にも左にもこの命を。捐るより他思案もなしと。先八九分はそれのみを。思ふものから成べくは。手と手をとりて死だらば。思ひ遺りはあるまじきに。九重はかの大尽が傍を片時離さねば。言あはすべき暇もなく。然とて

（下・13オ）

これは人伝にいふべきならず。如何にせん。任意離れて死ぬとても。我死だりといふことを。定かに告ずは彼知らず。たとへ廓の往来中で。死だからとて九重に隠さば矢張知らざるべし。知らねば何の詮もなく

実なきものと恨むらん。されば命を棄るにも。その捨がたきに次第あり。偖何様したかと趣舎。沈吟に胸も塞りて霎時ありしが思ふやう。この弱冠は大尽の甥としきけばまんざらの。他人にあらず恨みある人の

（下・13ウ）

枝葉のみならず。今にも逢て一伍一什を。告るに相違なき人なり。たえて恨みも遺恨もなけれど。常言にいふ往がけの。駄賃とはこれならん。この弱冠を討果し其侭此所で死だなら。隠れはあらず九重も。志あるものならば。倶に命を棄べきか。若また命惜まれて。そのまゝ在所へ伴なはれ。栄耀を尽す心なら。われ愚にして痴情に迷ひ。命を棄る侘侗の開山。人を恨まんやうもなし。今お哥は留守のその母も。遠くへ使ひにゆき

（下・14オ）

たりとて。両個の他に人なきは。是も物怪の倖ひなりとこのとき沈吟に胸おし定め。何気なき体に小膝を進め。傍におきたるその身の佩刀。一尺五寸ばかりなるを。抜より早く源之助が。肩の辺へうちかくる。実にこなたは思ひも掛ぬ。不意にはあれど豫てより。覚えある身の少しも透さず身を反けつゝ空を打せて傍なる刀を把あげても。直には抜ず其処に在あふ。樹楯は則　箱火鉢。重三郎をうち見やり。「心に迫ることありて

（下・14ウ）

暴に狂気なされたか。さても浮雲ない刃物三昧。一体此中本には。切たり張たりすることは。チト中なれど詮方なく作者もこゝへ書たと見えるが。成うことなら早々に刀を収めていふ事が。あるなら斯とお言なさい。思ふに吾儕は大尽の。甥といふので心せき。大方晩に引払ふことか。また心中を仕やうとか。内証を言れるだらうと察し。根を断て葉を枯さうとの。御了張かは知らないが。夫は少ゝ点違ひと。今言ても分るまいが。モウ少しすれば知れるサアその刀を

（下・15オ）

お収めなさいと。言た所が武士たるもの。抜た刀をそのまゝに。只収める法はない。実は吾儕はその大尽が。甥でもなければ赤の他人。夫を左様言て先方の。仕方を見るのは此方にも。種々深い訳あること。品に因たらお前と娼妓。思ひよらない僥倖が来やうもしれず。まづ気を定めて。その成行を御覧じろ」と星をさゝれしのみでなくまた何となく憑しき。心地せられて刀を収め【重】「ヘヱ、夫では大尽の。甥とは嘘でござりますか。ハテ異な仕組だナしかし

＊趣舎→とつおいつ…（「取りつ置きつ」の変化した語）あれやこれやと。（『日国』）
＊往がけの駄賃…馬子が問屋などへ荷物を受け取りに行くついでを利用して、よその荷物を運び、手間賃を得たところから）事のついでに他の事をして利益を得ること。また、ある事をするついでに他の事をすること。（『日国』）

（下・15ウ）

甚　无礼至極。真平御免下さりまし」ト陪礼られて源之助も形を改め【源】「これは〳〵御叮嚀のその仰せ。まづ〳〵無事でお互に。重畳でござりました」トいふ折門の腰障子を引あけて入来るお歌。われと我手に胸なでおろし【うた】「アゝ誠に怖かつた。ありやアまア重さん何様したんだエ。先刻帰つて這入うと。一寸ばかり障子をあけると。お前は刀を振あげて。彼お方にお向ひだから。恂として留やうと。思つたけれど曄々と光る刀の怖しく

（下・16オ）

誠に渾身が戦慄して。いまだに胴気が治まらない。勿論彼処に立て居て。少しは釈も聞ましたが。アノお前様は大尽さんの。甥御ぢやアないさうでございますネ」【源】「ハヽヽヽヽヽ実は虚言サ。左様言たら何と言た」【うた】「大尽さんのお言なはるにやア。「何だ馬鹿〳〵しい甥だの姪だの。其様な者の覚えはねへ。天窓で自己は兄弟なし。甥姪の有う訳かねへ。何だ可咲な奴が来たナ」ト少し考へて独話。「ハテ何様も怪しいはへ。家隷どもに分付て。一穿議せざアなる

（下・16ウ・絵）

噂する人の／来にけり／春の宵／柳ばし／小はつ
おうた
重三郎

（下・17オ・絵）

源之助

（下・17ウ）

めへか」ト小声で言ながらまた此方を向て。「嗟それも面倒だ。翌は是非立積りだから。其様なことに掛ツちやア居られねへ。お哥其方の宅に居るなら。早々におつ払ひなせエ。殊によると其様な奴にやア。盗賊がありもんだと。寄ても着れない挨拶だから。早々に帰つて来ました」【源】「ムヽ左様気に掛りやア疑ひなしだ。夫なら言て聞せるから。噫気にも出すぢやアねヘヨ。先頃母子の咄しで聞た。松原作右衛門とは吾儕の家隷」【うた】「ヱヽ」【源】「老

（下・18オ）

爺の供で賀茂川の。堤普請に出た処。両掛の名札のま違ひ。何方も同じ佐々木源太左衛門。夫ゆゑ這奴も老爺の旅宿へ。来て見た処。御用金。しつかり在に欲心生じ。其夜密に忍びいり。取らんとするを見付られ。既に老爺を切殺し。また松原にも疵を負せ。其金奪ツて逃去たり。其言訳に松原は。腹切たれど敵の名。小鬢の兀迄いひ遺し。小指はその時作右衛門が。切落したりといふ。左様して見ればお前にも。兄の敵の彼佐々木。今宵の中に

（下・18ウ）

手配りして。翌廓を出た所で。敵を討は嚢の鼠。夫に就ては重三郎さん。娼妓は誠の浮もの。何処へ往うと勝手次第。お前連て退が宜」ト聞てお哥は夢の中に。また夢を見し心地にて。嬉しいやうでもまた怖く。途方にくれたるその折から。帰り来るお哥の母。委しく噺せば是もまた。その驚きは大かたならず。評議に時をぞ移しける

鶯「塚千代酒初声第二編巻之下［終］

謝辞

・翻字にあたり、千葉大学・岡部嘉幸氏のテキストデータ（https://researchmap.jp/read0057015/published_works）の提供を受けた。また、東京大学国語研究室から翻字許可を賜わった。記して感謝申し上げる。

・本研究は JSPS 科研費 21K18364（藤本灯）、21J20733（佐々木委久）、22K00577（市村太郎）の助成を受けたものである。

（ふじもと・あかり　清華大学副教授）
（ささき・いく　本学大学院博士後期課程）
（くぼ・まさこ　本学大学院博士前期課程）
（たなか・ももか　本学大学院博士前期課程）
（いわさき・りんたろう　本学四回生）
（いちむら・たろう　本学准教授）